

7 (247・292)

高崎市文化財調査報告書第157集

豊岡後原I・II遺跡

下豊岡市営住宅建て替えに伴う発掘調査

1998

高崎市教育委員会

序

高崎市は、その地理的優位性から古来より交通の要衝として栄えてきており、現代も上越・長野新幹線、関越道など高速交通網の拠点であります。交流拠点としての本市は、その一方で「人と自然」「人と環境」が共存する『共生都市たかさき』の実現をめざし、まちづくりを行っています。

開発行為は豊かな都市を実現するために必要であります。その反面として地球規模の環境の変化や、市民遺産、とりわけ埋蔵文化財を消滅に至らせる側面も有しています。埋蔵文化財は、何百・何千年間大地に刻まれた先祖の叡智の結晶であり、発掘調査をすることによって過去のようにすを現代に蘇らせることができます。

本書にまとめた遺跡の発掘は、市営住宅建て替えに伴って行いました。一次および二次調査の結果、縄文・古墳時代、飛鳥時代から平安に至る集落の変遷の一端を解明することができました。発掘および整理作業に従事した方々、関係各位・各機関・ご協力下さった各方面の方々に、この場をおかりして御礼申し上げます。本書の報告が本市の歴史解明の一助となることを祈念して、ご挨拶いたします。

平成10年 9 月

高崎市教育委員会
教育長 砂田威夫

例 言

- 1 本書は平成6年度及び8年度高崎市豊岡地区市営住宅建設に係わる「豊岡後原遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2 『豊岡後原遺跡』は高崎市下豊岡町字後原1280番地、中豊岡町字後原533番地に所在する。
- 3 発掘調査は第一次調査が平成6年7月7日から11月30日まで、第二次調査は平成8年7月22日から12月27日まで行った。整理作業は平成9～10年度に行った。
- 4 調査組織
平成6年度
事務局 中島乙彦 武井洋一 神戸聖語
発掘調査担当 久保泰博 綿貫鋭次郎
平成8年度
事務局 浅田 鮎 神戸聖語 村井田雅明 倉澤かおる
発掘調査担当 綿貫鋭次郎 池田 敬
平成9年度
事務局 野尻 弘 神戸聖語 村井田雅明 倉澤かおる
整理担当 関口 修 池田 敬
- 5 調査面積 第一次調査 2449㎡ 第二次調査 1723㎡
- 6 本書の作成は関口・池田が編集を、本文執筆は関口が担当した。遺構写真は、久保・綿貫・池田が、遺物写真は綿貫・中村賢による。
- 7 本遺跡の自然科学分析は、駒古環境研究所に、鉄滓の自然科学分析は榎ハリノ・サーヴェイに、空中写真測量は㈱ワテック、遺構測量は㈱測研、遺物写真実測は㈱シン技術コンサル、出土鉄製品保存処理は武蔵野文化財修復研究所に委託した。石材同定は飯島静男氏に依頼した。
- 8 発掘調査から整理にかけて、下記の方々からご指導、ご助言を賜った。記して感謝申し上げます。(敬称略)
五十嵐信 大江正行 小野和之 神谷佳明 横岡正信 田口一郎
- 9 遺物・写真・図面・記録等は高崎市教育委員会が保管している。

凡 例

- 1 検出した遺構をなるべく盛り込もうとしたが、すべての遺構を掲載することは不可能であり、二次調査の住居跡や土坑のかなり部分を割愛している。
- 2 遺構図は、住居跡は1/60、土坑は1/40、炉跡は1/30を基本としそれ以外はスケールを付した。遺物のうち土器は1/3、瓦は1/6、鉄滓、鉄製品は1/2を基本とし、それ以外の縮小率は文章化した。土層セクション図に付した数字は海拔標高を示し単位はメートルである。また遺構図にある「A」等の記号はセクションポイントを示す。
- 3 遺構図の矢印記号は、国家標準第IX系における北方向を示す。
- 4 遺構に新旧関係がある場合は古い遺構を破線、新しい遺構を実線で表した。破線は推定、複線にも使用した。
- 5 遺物図のうち、破片断面の左側は表面、右側は裏面である。
- 6 土器の右に黒とあるのは内面黒色処理を表す(黒色土器A)。また左右にそれぞれ黒とあるのは内外面黒色処理を表す(黒色土器B)。土器の両方向の矢印はヘラミガキを表す。また緑釉陶器は土器図の右に緑、灰釉陶器は右に灰の文字を書いて示した。
- 7 遺物観察表は、古墳時代以降の遺物についてまとめた。観察表の法量は単位センチメートル、()内の数値は推定値を表す。瓦の厚さは平均的な厚さを計測した。銭貨観察表は単位ミリメートルである。
- 8 遺構の幅、深さはデータの最大寸法である。また遺物の口径、器高、底径も最大部分を計測した。
- 9 土器の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「標準土色帖」(1987年版)を用いた。
- 10 本書中の遺構記号は調査時のものを用いた。これは、高崎市教育委員会が標準的に使用しているのと異なるものが多いのでここに示す。
S J 縄文竪穴住居跡
S H 古墳一平安竪穴住居跡
S T 竪穴状遺構(形態不規則、時期不明)
S B 掘立柱建物跡
S M 水路 溝
S D 土坑、墓室、貯蔵穴等
S R 鍛冶跡、炉跡
- 11 本書は一次、二次調査の合冊本である。
第一次調査 遺跡番号 247
第二次調査 遺跡番号 292
遺構番号はそれぞれ1からつけた。これを本書では以下のように表現している。
I-1号住居跡 遺跡番号247(第一次調査) 1号住居跡
II-1号住居跡 遺跡番号292(第二次調査) 1号住居跡
- 12 周辺遺跡位置図は、高崎市発行1/20,000の地図を、遺跡位置図は高崎市発行の1/2,500の地図をそれぞれ原図として用いた。

目 次

I 調査に至る経緯と経過	1
1 調査に至るまで	1
2 調査の経過	1
II 調査の方法	1
III 遺跡の立地	2
1 地理的環境	2
2 歴史的環境	2
IV 検出した遺構と遺物	3
1 遺構・遺物の概要	3
2 縄文時代	3
3 古墳時代	4
4 飛鳥・奈良・平安時代	5
1 住居跡	5
2 竪穴状遺構	12
3 土坑	13
4 伊跡	15
5 礎石	15
5 中近世	15
1 土坑	15
2 大量出土	16
3 船跡	16
4 集石遺構	16
V まとめにかえて	17
1 縄文時代	17
2 古墳時代	17
3 飛鳥・奈良・平安時代	17
4 中世の遺構・遺物について	18
図版	19
観察表	183
VI 豊岡後原遺跡から出土した陶片の蛍光X線分析	234
VII 豊岡後原遺跡から検出された鉄滓の成分分析	235

写真

I 調査に至る経緯と経過

1 調査に至るまで

戦後極度の住宅不足が生じた中で建設された市営住宅は、現在はかなり老朽化したものが多い。建設部建築住宅課では、市営住宅を順次鉄筋コンクリート造りに建て替えてきている。

下豊岡市営住宅も建築住宅課の計画の一環として、平成6年度中に建て替えを開始することになった。市営住宅のあるこの場所は、土器が多数散布する場所であり地下に遺構が存在することは充分予想された。また、平成5年度の試掘の結果調査によっても遺跡地であると判断された。既存の市営住宅の基礎部分は遺構を破壊しているとも思えるが、それ以外の場所では遺構面は残り残っていて、かなり遺構・遺物が残存することは確実である。

高崎市教育委員会文化振興課は関係部局と協議を重ねたが、市営住宅は公益性の高いものであり、また建築方法として高層のコンクリート造りが必要であるとのことであった。建て替えに伴い遺跡が消滅することは確実であり、発掘調査を行うこととなった。この市営住宅は2回に分けて工事が行われるとのことで、よって調査も2回に分けて行った。

2 調査の経過

発掘の一次調査は、平成6年7月7日から11月30日まで行った。また二次調査は、平成8年7月22日から12月27日まで行った。なお、整理作業は発掘調査終了とともに開始したが、主として平成9年度中、及び平成10年度9月末日まで行った。

II 調査の方法

土器の散布と試掘調査の結果、遺構・遺物が濃密に存在することは確実であった。また、工事が2回にわたることから調査もそれに合わせ2回に分けて行うことも、関係部局との話し合いで決定していた。よって、遺跡地全体にグリットの網をかぶせ、調査することとした。

グリットは図3で示したように5mメッシュで北西隅が起点(A,0)とし、南に向きB,Cというようにアルファベットで、東方向は5,10というようにアラビア数字で表し、グリット内部の遺構は、北西のアルファベットと数字の組み合わせた名称で呼ぶ。例えばLと12が北西隅で交差していれば、その5mメッシュの内部はL-12である。このように調査で検出した遺構及び遺物の出土地点は、両者を組み合わせ呼称した。

調査にあたっては、盛土及び表土が厚かったため両者を掘削機で除去し、その後人力によって精査した。本道跡は遺構の重複が激しく、遺構単位では確認出来なかったものがある。遺構図で住居跡が切れた部分があるのはそのためである。

一次調査では調査区を北と南に2分割し、また二次調査では北、南、東と3分割して行った。遺構は一次調査及び二次調査ともに1番から順次名称をつけた。一次調査は、高崎市道跡番号247、二次調査は292である。本報告書では、例えば247の1号住居跡を1-1号住居跡と記述している。

測量は国家基準並びに水準の基準杭打ちを業者に委託し、その杭をトランシットを用いて派生し、1/10、1/20の造り方測量を行った。また必要に応じて業者に平板測量、空中写真測量を委託した。

写真撮影は35mmモノクロ及びリバーサルを、また必要に応じて中型カメラによるモノクロ撮影を行った。

III 遺跡の立地

1 地理的環境

豊岡後原遺跡は、高崎市下豊岡町字後原、中豊岡町字後原にある。高崎市街地から見て鳥川を越え、西北西約3.5km、標高は103～105m程度である。遺跡地のすぐ北側をJ R信越線が走り、南は豊岡団地である。このように現在も良好な居住環境で、付近一帯は小高い台地地形をなす。この台地は安中市域で秋間丘陵、高崎では八幡台地に連続し、特に鳥川に沿った位置が顕著に高い。そして、中豊岡町、下豊岡町、北久保町を中心とする豊岡地区に続く。遺跡の存在する北には鳥川が南東に流れている。川に接する部分は急激な崖である。それに対し八幡台地から豊岡地区に向かう南部分は穏やかな傾斜をもち、やや低地が広がる。かつては水田地帯であったろう。また、八幡台地北の鳥川との間の町屋町、金井町、下大島町も低地地形である。遺跡調査例はないが、試掘によれば鳥川の流路となっていた時期があったと考えられる。この場所も水田耕作が可能な場所である。八幡台地は沢により三分割されている。この沢の近くの谷地もまた水田耕作可能な場所であるが、面積はあまり広くない。

2 歴史的環境

八幡台地から豊岡後原遺跡（1）にかけては土器の分布が多く、集落が連続して存在すると予想される。豊岡後原遺跡近くで調査した遺跡も多い。旧石器時代の遺構、及び遺物は付近には確実な調査例はない。

縄文時代は、八幡中原遺跡（2）で、原位置を保った後世の遺構中からではある草創期の尖頭器が発見されている。また、若川遺跡（3）で竪穴式住居跡や散石住居跡を、剣崎稲荷塚遺跡（4）で住居跡や土坑が発見されている。弥生時代は、剣崎長瀬西遺跡（5）、引間遺跡（6）、八幡遺跡（7）で後期の住居跡が検出されている。また、八幡遺跡では土庫裏の発見がある。

古墳時代では引間遺跡で方形周溝墓が1基発見されている。周溝墓の溝中には浅間C軽石層が認められ、C軽石降下以前の築造と考えられる。出土土器には菰2、器台などがある。また、八幡遺跡、八幡中原遺跡、上豊岡引間IV遺跡（8）、七五三引間遺跡（9）、大島原遺跡（10）などでは古墳時代の住居跡が調査されている。上豊岡引間IV遺跡では、浅間C軽石降下以前の古墳時代のS字墓や竈などの土器と構式土器が共存しており、古墳時代の土器研究で貴重な資料追加となっている。

古墳は付近に多数存在するが、5～7世紀の群衆墓は剣崎長瀬西遺跡、6世紀の横穴式古墳を八幡遺跡、大島原遺跡、引間遺跡で調査している。剣崎長瀬西遺跡では横石家や馬墓の発見もある。八幡台地は首長墓が多く存在することでも名高い。5世紀の大円墳である剣崎長瀬西古墳（11）、南方後円墳の平塚古墳（12）、6世紀の横穴式石室を持つ二子塚古墳（13）、観音塚古墳（14）などがある。

奈良・平安時代の集落は、引間遺跡、上豊岡引間IV遺跡、八幡遺跡、若田屋敷Ⅰ・Ⅱ遺跡（15）、剣崎稲荷塚遺跡にある。なお、引間遺跡では2号古墳の石室中から和同開珎が出土している。和同開珎の出土は、本市ではこの引間遺跡と豊岡後原遺跡、熊野堂遺跡の3例がある。また、上豊岡引間IV遺跡では、平安時代の小銀冶遺構を調査し鑄の羽口や鉄滓が出土している。

高崎地区は水田遺跡の多い場所である。しかし本遺跡近くで見ると引間田遺跡（16）で浅間B軽石層下の水田跡を調査したにすぎない。なお、引間遺跡と上豊岡引間IV遺跡で浅間B軽石下の畝跡とみられる畝状遺構の調査例がある。浅間C軽石下は周溝墓や居住土の確認はあるが、それに埋没した水田跡の確認例はない。同じく、古墳時代のF A、F P下水田跡は周辺では未だ調査例がない。

中世では、上豊岡引間V遺跡（17）で人骨の出土した地下式土坑の調査がある。

IV 検出した遺構と遺物

1 遺構・遺物の概要

一次調査では、北と南に分かれた調査区で遺構・遺物の検出をはかった。飛鳥・奈良・平安時代を通じて竪穴式住居跡を71軒、縄文時代の竪穴式住居跡を1軒発見した。性格がはっきりした竪穴式遺構と名付けたのは2基、うち1基は平安時代である。土坑は時代を決定するのが困難なものが多いが、総数で237基検出している。その中には縄文時代の土器埋設土坑や、中世の地下式坑3基、銭貨を埋納した土坑も含まれる。他に古代の炉跡が17カ所ある。このうち5カ所で鉄滓が、またその1カ所では鑄の羽口が同時に出土し、かつて鍛冶跡があったとみられる。鍛冶跡はかなり壊され痕跡もとどめない程度である。また、17カ所の中には住居跡の遺跡や性格不明の遺構も含まれると考えられる。溝跡は3条確認した。東西北に走るものである。

二次調査では、北と南、東区の3カ所で調査した。古墳前期の方形周溝墓を1基発見した。周溝墓の溝からは北陸系の土器と在地の構式土器が同時に出土している。竪穴式住居跡は、総数で98軒検出した。土坑は84基発見した。これらの中には縄文時代の土器埋設土坑も含まれる。中世以降では、下部に土坑があり上部に甕を置いた連続した動物の墓とみられる集石遺構を検出した。溝跡は13条確認したが、その中には中世の溝跡（10号溝）も含まれる。

2 縄文時代

本遺跡では旧石器時代の遺構・遺物の発見はない。縄文時代では竪穴式住居跡と土坑及び土器を埋設した土坑を発見している。また、後世の住居跡や土坑などから土器や石器の出土が多い。

I-1号住居跡 (247-SJ1 図4.5)

I-J、7.8グリットにある。規模は東西4.5m程度であり、内部に縄文土器の分布がみられた。掘り込みは6～8cm程度と浅いが、直径0.2m～1.0mの規模のピットを7カ所確認した。出土土器は縄文中期後葉である。

I-101号土坑 (247-SD101 図6)

H 6グリットにある。直径1.0～1.1mの楕円形で深さ0.15mある。小型の土製品と切片が出土している。小型の土製品は口径0.3cm高さ8.4cm底径4.4cmである。口唇部下に帯状に粘土紐を巻き付けている。図の左側では粘土紐は欠損しているが、本来は一周したと考えられる。また、断面図のようにな空中の把手につながる。底部近くにも中央を空中にした把手が対照的位置にある。縄文中期後葉と考えられる。

I-181号土坑 (247-SD181 図7.8)

G-12グリットにある。東西2.1m南北1.7m深さ0.8mの土坑中から2個体の縄文土器が重なって出土した。図のNO2が下でNO1が上で両方の土器は口縁を上にした状態である。土器と土坑の両方との間の土層は埋め戻したように見られる。これらの土器は重ねられた状態で埋設されたと考えられる。NO1の土器は口縁部が欠損している。現高は46cmある。胴部上位は渦巻状に下位はV字状に、いずれも沈線区画され内部はL R縄文で充填される。NO2はかなり欠損部分が多く石膏で復元した。口径56cm高さ60cmある。口縁は平縁で口縁下に横紋に、また縦方向に隆起線で区画している。区画内部は一つおきにL R縄文で充填している。両者とも土器の特徴から縄文中期後葉と考えられる。

II-1号土坑 (292-SD1 図9.10)

L-23グリットにある。東西2.3m南北2.6mの浅い土坑がある。（この土坑についての平面図なし。よってセクション図から土坑範囲を推定した。土坑の範囲は破線で示した）内部には直径0.9m程度の一段深くなっている。

全体としての深さは0.3m程度である。上坑中から土器と乳棒状石器及び3～15cm大の礫、多孔石が出土している。土器はかなり破片となっており、内面を上に向けている。なお、土器の底面は上坑掘方の10～15cm上であり、土坑が埋まっていく途中に入ったことがわかる。乳棒状石器も位置がかなり上で、土器のすぐ南となる。土器の特徴から縄文中期後葉と考えられる。

NO1の土器は現高49cm、口縁部及び胴部の3分の1程度が欠損している。胴部上位は集合沈線による波状の文様、下位は逆Uの字状に2枚の沈線で区画しL R縄文で充塞している。縄文中期後葉である。NO2は乳棒状石器。長さ20.6cm幅4.3cm厚さ3.4cm、石材は緑色片岩である。下部が意図的に削られている。

II-42号土坑 (292 SD42 図11)

L-21グリットにある。南北0.5m東西0.35m深さ0.1mである。NO1の耳栓はこの土坑中から出土している。NO2の土器はこの北にある、42土坑に切られる42b土坑中 (292-SD42b) からの出土である。

II-60号土坑 (292-SD60 図12)

L-23グリットにある。直径1.0～1.2mのややゆがんだ円形の土坑で深さ0.3mである。覆土上部から深縁の一部が出土した。NO1は口縁は平縁、口縁下に横方向の沈線がある。胴部は逆Uの字に沈線区画し、外側はL R縄文で充塞している。NO2も逆Uの字の沈線区画がみえる。NO3は横方向に沈線があり上下を縄文で埋めている。

II-101土坑 (292 SD101 図13)

F、G 19グリットにある。直径1.2mのややゆがんだ円形の土坑の北西隅から、NO1の土器が口縁を上に向け立った状態で出土した。口径19.2cmで高さは33cmある。ただし土器は破片となっており上下の部分で接点はなく、石膏を入れた状態で復元である。口縁は平縁、口縁下に横方向の沈線がある。胴上部は渦巻状、下位はAの字状断文、L R縄文で充塞している。縄文中期後葉と考えられる。

3 古墳時代

古墳時代は方形周溝墓を1基検出している。

1号方形周溝墓 (SZ1、調査番号292-SM4,5,6 図15～17)

K、L、M-21,22,23,24グリットにある。方形周溝墓は東に向かって次第に低くなっていく場所にある。調査では、方形周溝墓の西・北・東溝を調査した。南溝は調査区外、北溝の東側は時期の新しい溝に、また東溝の南側も他の溝に切られている。主体部は削平を受けたため検出できなかった。方形周溝墓の方位は北35度西、規模は、溝の内側で東西10.9m、溝の外側で14.9mある。南北は南溝が調査区外のためはっきりとは知られないが、溝の内側で少なくとも9.5mある。西溝は幅2.5m深さ0.99mで、方角部寄りが急で外縁はゆるやかに立ち上がる。北溝は幅2.3m深さ0.93mで断面は逆台形である。東溝は幅1.9m深さ0.69mとやや浅く断面Uの字形である。なお、北西コーナ一部は深さ0.57m、北東コーナ一部は深さ0.3mとグリッド状にやや浅くなっている。溝の覆上の土層記録には、浅間C軽石層が存在するとはないが、浅間C軽石層は二次堆積で覆上に含まれていると考えられる。溝からは古式土師器 (1～11、14) と棒状土器 (12、13、15～19) が出土している。古式土師器では、2、4～8の口縁が大きく直立する北陸系の土器の存在が目立つ。

4 飛鳥・奈良・平安時代

1 住居跡

I-1号住居跡 (247-SH1 図18～20)

G-10,11グリットにある。中央の大部分は建物基礎によって破壊される。西には43号住居跡が重複、1号住居跡が新しい。住居は東辺及び北東隅のみ確認。長軸は北8度東、竪は南東部にある。幅0.9m奥行0.7m、内部には礎が数多くまた電前に灰が広がる。

I-2号住居跡 (247-SH2 図21)

G、H-9,10グリットにある。北東は建物基礎によって破壊され、北西は土坑に切られる。住居は南辺を4.6m及び西辺の南半部を確認した。主軸は北75度東である。竪は破壊された部分に存在すると考えられる。

I-3号住居跡 (247-SH3 図22)

H-13,14グリットにある。下部の4号住居跡と重複するものだが、詳細な広がりには確定できなかった。

I-4号住居跡 (247-SH4 図23,24)

G-14グリットにある。上部には3号住居跡が重複している。また、西で7号住居、153土坑、13号炉跡と重複しこれらに切られる。住居は南東隅と北西隅を検出、東西は5.3m。主軸は北15度西、竪は南東部にある。幅0.8m奥行0.4m、電前に礎が見える。

I-5号住居跡 (247-SH5 図25,26)

H、I-11,12グリットにある。北東に6号住居、南に4号型穴が重複する。東西2.1m南北3.1m、東辺南寄りには竪がある。幅0.6m奥行0.6mで、電内に礎がある。

I-6、6a号住居跡 (247-SH6 図27～31)

G、H-11,12グリットにある。東西5.6m南北5.4mの方形住居の南に方形の張り出しがある状態であるが、調査でもまた修理段階でも、住居跡がこの形なのか或いは住居跡が重複したためなのか、その確定は出来なかった。なお6及び6aも調査時の名称であり特に場所を限定したものではない。出土土器には明らかな時期差が見いだせるため、住居跡が重複していることは確実であろう。帯金具 (49) の出土が目立つ。

I-7号住居跡 (247-SH7 図32,33)

G 13,14グリットにある。4号住居と重複し遺物から見るとこれより新しい。また、153土坑と重複しこれより新しい。住居の規模は東西2.4m南北3.4mである。主軸は北12度西である。竪については不明。

I-8号住居跡 (247-SH8 図34,35)

F 12グリットにある。南西には53号住居跡と重複しこれより古い。遺構が53号住居より深いため全体が捉えられた。東西4.2m南北3.7mの隅丸長方形、長軸は北84度西で溝が巡る。竪は東辺中央やや南寄りにある。

I-9号住居跡 (247-SH9 図36,37)

H-13,14グリットにある。北東隅は73土坑と重複しこれより古い。住居跡の北及び中央を確認できた。東西5.4m南北3.3m±である。主軸は北7度西である。竪は北辺やや東寄りにある。袖がやや内側に突き出し、幅0.8m奥

行き0.9mである。竈の東に85cm×70cm深さ60cmの貯蔵穴がある。

I-10号住居跡 (247-SH10 図38,39)

G-13グリットに存在する。住居跡北部分を検出した。東西幅5.1mである。壁にそって周溝が走る。

I-11号住居跡 (247-SH11 図40,41)

II-15グリットにある。西側は建物基礎に壊される。南北4.4m東西3.1m、長軸は北4度東である。竈は東辺南寄りである。幅0.6m奥行き0.4mである。

I-12号住居跡 (247-SH12 図42,43)

J-4,5グリットにある。1号土坑、47号土坑と重複しこれより古い。東西4.3m南北4.5m(推定)長軸は北4度東である。竈は東辺の中央やや南にある。幅1.1m奥行き0.9mである。南東部以外は周溝が走る。

I-13号住居跡 (247-SH13 図44,45)

J-6グリットにある。北西を建物基礎によって破壊され、南辺は3号土坑に切られる。東西3.3m南北3.2mである。主軸は北2度東。南東の竈はかなり破壊されている。その南に貯蔵穴がある。

I-14号住居跡 (247-SH14 図46)

L,M-7,8グリットにある。北部分を32号土坑に切られる。中央から南の大部分は調査区外である。

I-15号住居跡 (247-SH15 図47,48)

K,L-5,6グリットに存在する。東西3.8m、南は土坑50・38・39によって切られる。北辺中央に竈が、その西に貯蔵穴がある。

I-16号住居跡 (247-SH16 図49)

K-4,5グリットにある。東西4.5m南北2.7mである。長軸は北89度東、西辺中央に竈がある。幅0.9m奥行き0.5mである。

I-17号住居跡 (247-SH17 図50)

J,K-4,5グリットにある。東部分を47号土坑に切られる。南北2.3m、長軸北86度東である。竈は南辺やや西寄りである。幅0.8m奥行き0.4mである。土器は土師器の坏小片が出土したにすぎない。

I-18号住居跡 (247-SH18 図51)

F,G-5グリットにある。19号住居跡の北であるが、大部分は129号土坑に切られ規模形態は不明。

I-19号住居跡 (247-SH19 図52,53)

F,G-5グリットにある。20号住居跡と重複し19号が新しい。東西2.3m南北2.7m、竈は東辺中央幅90cm奥行き60cmである。住居跡北西部埋没土層から和同開珎が出土している。市内では引間遺跡、熊野堂遺跡について3例目、集落では2例目である。

I-20号住居跡 (247-SH20 図54,55)

G-5グリットにある。19号住居跡と重複しこれより古い。また169号土坑にも切られている。南北4.2m長軸は北2度西である。竈は不明。

I-21号住居跡 (247-SH21 図56~58)

F-6,7グリットにある。東西4.2m南北3.2mと東西に長い。長軸は北83度東で東辺中央やや南寄りに竈がある。また、住居床面中央に焼土の広がりが見られる。

I-22号住居跡 (247-SH22 図59~62)

G,II-6グリットにある。南北5.3m東西3.7mで、長軸は北5度東である。竈は東辺中央にある。幅1.0m、奥行き0.55mである。「食」と書かれた墨書土器や、畿内系の緑釉陶器(19)が出土している。

I-23号住居跡 (247-SH23 図63)

G-6グリットにある。南は22号住居跡でこれに切られ全体像は不明なところが多い。

I-24号住居跡 (247-SH24 図64)

G-7グリットにある。東西4.1m南北4.5m、長軸は北2度東である。竈は北辺中央にある。両袖が住居内部に張り出し先端は石で補強している。袖幅0.55m奥行き0.9mを測る。

I-25号住居跡 (247-SH25 図65~70)

E-6グリットにある。竈及び貯蔵穴付近以外は170号土坑と建物基礎によって切られ不明である。竈は幅1.0m奥行き1.4m、袖部分と内部に石が見られるがこれらは補強用であろう。貯蔵穴は竈の南にある。直径0.7m、深さ0.5mで内部に多量の灰が見られる。貯蔵穴内部から大量の土器(1~30)が出土している。

I-26号住居跡 (247-SH26 図71~73)

E-5グリットにある。土器が集中して出土したので調査の時点では住居跡として扱ったがその範囲形態等は不明である。図の方形の遺構はこの住居跡以前の土坑である。

I-27号住居跡 (247-SH27 図74~76)

E-4グリットにある。北を建物基礎で壊され、東は142土坑で切られる。西は34号住居跡と重複し、27号住居跡が新しい。東西幅は3.3mで主軸は北13度東である。竈等は不明。

I-28号住居跡 (247-SH28b 図77~79)

E-7,8グリットにある。北部分端部は調査区外であり、また中央は土坑141や建物基礎によって壊されている。南東部は土坑と重複しこれより新しく土坑上に住居がつくられている。調査では住居西部に張り出しがあるとしている。

I-29号住居跡 (247-SH29 図80,81)

F,G-8グリットにある。東西3.8m南北4.1m、東辺中央に竈、その南に貯蔵穴がある。南西部は74土坑に切られる。

I-30号住居跡 (247-SH30 図82)

F-7グリットにある。東西2.4m南北3.1m、東辺中央やや南寄りに竈をもつ。焚き口は石で補強されている。

I-31号住居跡 (247-SH31 図83)

E-10グリットにある。西の立ち上りのみを確認、方位は北6度東。

I-32号住居跡 (247-SH32 図84~86)

F、G-9グリットにある。住居跡の北辺と電を確認した。中央及び南方は他の遺構によって切られていると考えられる。電図には行軸が見られ、またその東には貯蔵穴がある。

I-33号住居跡 (247-SH33 図87~89)

E-3,4グリットにある。東側を土坑140、163に切られる。また、34号住居跡と重複しこれを切る。東西幅2.1mである。1~30はこの住居跡の遺物、次の1~4は住居下部にあった土坑の遺物である。

I-35号住居跡 (247-SH35 図91)

記録図なし。

I-36号住居跡 (247-SH36 図92)

記録図なし。高熱を受けた石(3)と粘土(2)の存在は注目される。

I-38号住居跡 (247-SH38 図93)

G、H-3,4グリットにある。北を99土坑に、南を84土坑に切られる。東西幅3.2mで電は東辺にある。

I-41号住居跡 (247-SH41 図94)

G-9,10グリットにある。重複が多く広がり不明。

I-42号住居跡 (247-SH42 図95)

調査記録は42号住居跡であるが、32号住居跡の床面出土遺物をとりあげたと記録にあり32号と同一と考えられる。

I-43号住居跡 (247-SH43 図96,97)

F-10グリットにある。南は1号住居跡である。土師質土器皿の存在は1号住居跡と共通する。

I-44号住居跡 (247-SH44 図98)

F-10グリットにある。西辺の一部を確認した。重複が激しく大部分は不明。

I-45号住居跡 (247-SH45 図99)

F-14グリットにある。46号住居跡に切られる。北の大部分は調査区外である。

I-46号住居跡 (247-SH46 図100)

E、F-13,14グリットにある。10号住居跡と47号住居跡に切られる。東辺に電を確認した。

I-47号住居跡 (247-SH47 図101~103)

F-13,14グリットにある。46号、10号住居跡を切る。東辺に電を確認した部分と、南辺の一部以外は不明。

I-48号住居跡 (247-SH48 図104)

E、F-12,13グリットにある。47号住居跡と重複、新旧関係は不明。

I-49号住居跡 (247-SH49 図105)

記録図なし。土器はまとまりがある。

I-51号住居跡 (247-SH51 図106,107)

F-11グリットにある。50号住居跡と重複する。また、北東部は179号土坑に切られる。

I-53号住居跡 (247-SH53 図108,109)

F-11グリットにある。8号住居跡と重複しこれより新しい。南北4.0m東西4.0m程度である。

I-101号住居跡 (247-SH101 図110~112)

N、O-10,11グリットにある。東を3号溝、南を1号溝に切られる。また北東は土坑232に切られる。東西5.6m南北5.1m、ほぼ方形で方位北2度西。北辺中央の電は幅60cm奥行70cm。北東に貯蔵穴がある。周溝が巡る。

I-102号住居跡 (247-SH102 図113,114)

N-10グリットにある。住居跡北東部と北西部を確認、他の部分は重複が激しく不明。東西3.4m。

I-103号住居跡 (247-SH103 図115,116)

N、O-9,10グリットにある。102号住居跡と重複関係にある。西辺は確認できたが他の部分は不明。南北4.7m。

I-104号住居跡 (247-SH104 図117)

N-9グリットにある。南北2.9mの方形の住居跡である。西は建物基礎によって破壊されている。

I-105号住居跡 (247-SH105 図118)

N-8,9グリットにある。西を土坑217、218に、北を建物基礎によって壊され住居南東部のみを確認。

I-107号住居跡 (247-SH107 図119)

M-12グリットにある。108号住居跡と重複関係にある。西は3号溝に切られ北は調査区外。

I-108号住居跡 (247-SH108 図120,121)

M、N-12グリットにある。107号住居跡と重複関係にある。南辺を確認したが西は3号溝に切られる。

I-109号住居跡 (247-SH109 図122,123)

M、N-12,13グリットにある。東西2.7m、長軸方位北7度西の南北に長い住居跡。電は東辺中央やや南寄りにある。

I-110号住居跡 (247-SH110 図124)

N、O-13グリットにある。住居跡の西部を確認。住居南は1号溝に切られまた東は調査区外である。

I-111号住居跡 (247-SH111 図125)

N、O-12グリットにある。西側を3号溝及び202土坑に切られる。南北3.2m方位北8度西の方形住居跡である。東部分も建物基礎の擾乱及び電は不明。

II-5号住居跡 (292-SH5 図126)

N-15グリットにある。6号、4号住居跡と重複している。住居跡の西北部のみを確認、大部分は不明。

II-8号住居跡 (292-SH8 図127)

M-14グリットにある。9号、10号、23号住居跡と重複しそれぞれに切られる。住居跡の南西隅を確認した。

II-15号住居跡 (292-SH15 図128,129)

L-16グリットにある。西側で10号土坑と重複し、土坑に切られている。また、北は調査区外である。よって、住居跡は南東部のみを確認した。土師器の他に、須恵器盤・鉢・平瓶が出土している。

II-16号住居跡 (292-SH16 図130,131)

L、M-16,17グリットにある。東西5.7m南北5.5mのややいびつな台形を呈する。主軸は北3度東である。竈は南東隅にある。袖を河原石で補強している。袖幅0.6m奥行き1.0mである。

II-22号住居跡 (292-SH22 図132,133)

L、M-15グリットにある。東側は他の住居跡と重複する。南北幅3.5mの規模である。竈は袖幅60cm奥行き80cm。

II-23号住居跡 (292-SH23 図134)

M-14,15グリットにある。24号住居跡、8号住居跡と重複している。南北2.8m、長軸方位北77度西である。竈は東辺中央やや南寄り袖幅50cm奥行き80cm。左袖及び奥に河原石が補強の為に置かれている。

II-27号住居跡 (292-SH27 図135)

L-16,17グリットにある。東西2.8m南北2.1mで、東辺中央やや南寄りに竈がつく。

II-31号住居跡 (292-SH31 図136,137)

L-18グリットにある。南北幅2.0mと小型である。図示した以外は不明。

II-32号住居跡 (292-SH32 図138,139)

M、N-17,18グリットにある。南北5.0m東西3.2mの隅丸長方形を呈す。主軸は北2度西、竈は確認されない。調査時33号住居跡との重複としたが、セクションから見ると重複はない。床面は平らでなく東西に1条の畦状の高まりがある。また、北東部も高い。竈もないことから住居跡でなく土坑の可能性もある。

II-35号住居跡 (292-SH35 図140)

N-17グリットにある。36号住居跡と北部分で重複している。東西3.1m南北3.0mの方形を呈す。竈は不明。

II-36号住居跡 (292-SH36 図141)

M、N-17グリットにある。北隅の66号土坑と重複し土坑よりは新しい。また南では35号住居跡と重複するが断片は不明。セクションで見ると床面にやや凹みがある。東西2.6m南北2.9mの規模である。

I-37号住居跡 (292-SH37 図142)

N-18グリットにある。住居跡南辺の一部を確認したが、大部分は不明である。

II-38号住居跡 (292-SH38 図143)

N-17グリットにある。住居跡の南西部及び南東部を確認した。東西幅5.5mである。北は35号住居跡と重複し不明。竈は南東部隅にある。河原石を補強材とし袖は住居内部に張り出している。袖幅0.65m奥行き0.8mである。

竈中央、図の1の境中に7cm×6cm大の河原石(粗粒礫石安山岩)を入れ、3がかぶさる状態であった。1の境中には灰が入っており、また境の外側は灰が付着していた。自然科学分析の結果、灰はススキ属のものである。

II-43号住居跡 (292-SH43 図144)

N-19グリットにある。42号住居跡と重複し、これよりは新しい。東西幅は2.9mである。

II-45号住居跡 (292-SH45 図145,146)

O-16,17グリットにある。住居跡の南西部部分を確認した。

II-48号住居跡 (292-SH48 図147,148)

K、L-18,19グリットにある。東西4.6m南北4.1mの隅丸台形を呈す。竈は不明。

II-49号住居跡 (292-SH49 図149)

K-19グリットにある。48号、66号住居跡と重複する。住居跡の東辺のみを確認。

II-53号住居跡 (292-SH53 図150)

L、M-19,20グリットにある。東西3.1m南北3.4mの長方形を呈す。72号住居跡と重複しこれを切り、また71、72土坑と重複する。

II-55号住居跡 (292-SH55 図151,152)

O-15グリットにある。重複が激しく竈のみを確認した。袖幅0.6m奥行き1.0mである。

II-61号住居跡 (292-SH61 図153,154)

M、20,21グリットにある。東西3.7m南北4.5mの隅丸長方形を呈す。数多くの石で補強された竈が東辺やや南寄りにつく。袖幅0.55m奥行き1.0mである。

II-63号住居跡 (292-SH63 図155)

L、M-22,23グリットにある。東西3.4m、主軸は北37度東である。竈は不明。

II-72号住居跡 (292-SH72 図156~158)

L-20グリットにある。北は73号、南は53号住居跡と重複する。東西3.1m南北3.0mの方形、住居跡の方位は北6度西である。竈は東辺中央近くにある。左右の袖がやや住居内部まで出ており、先端には補強の石が見られる。袖幅0.5m奥行き1.2mである。貯蔵穴は、直径0.6m深さ0.25mで断面はゆるやかな逆台形である。

II-73号住居跡 (292-SH73 図159)

K、L-20グリットにある。72号住居跡と重複しこれに切られる。東西2.9m南北2.5mの方形を呈す。竈は確認出来ない。

II-81号住居跡 (292-SH81 図160~162)

K、L-20,21グリットにある。34,73,35土坑や82号住居跡と重複する。82号住居跡よりは新しい。東西3.5m南北3.0mの長方形で東辺中央に石で補強のある袖幅0.55m奥行き1.0mの竈がつく。方位は北24度東である。

II-82号住居跡 (292-SH82 図163~165)

J,K-20,21グリットにある。東西5.9m南北4.8mで主軸は北8度西である。竈は北辺中央付近にある。竈上部には3の竈に2の甕が差し込まれた状態で出土した。これらの2個体の土器は、竈の補強材の可能性がある。

II-84号住居跡 (292-SH84 図166)

L,M-18,19グリットにある。上部を3号溝が走る。東西3.5m南北2.7mのややいびつな台形を呈す。主軸は北9度東。竈は北東隅にある。また、4本の主柱穴がある。

II-86号住居跡 (292-SH86 図167)

L,M-15,16グリットにある。22,24号住居跡と重複する。重複が激しく調査では住居跡の南東隅を確認した。南東隅に灰が見られるが土坑が重複しており竈はかなり壊されている。

II-102号住居跡 (292-SH102 図168)

G-18グリットにある。101号住居跡と重複する。住居の北西コーナー部を確認したが、大部分は不明。

II-108号住居跡 (292-SH108 図169,170)

H-17グリットにある。削平が多く竈のみを検出した。この状態からすると住居跡は竈の南東に広がると考えられる。

II-109号住居跡 (292-SH109 図171,172)

G-19グリットにある。120号、112b号住居跡と重複する。112b号住居には切られる。調査では住居跡南東部のみを確認した。7の石製の竈方には4カ所にかかり孔が見られる。

II-112号住居跡 (292-SH112 図173~175)

G,H-18,19グリットにある。109号、112a号、120号住居跡と重複している。また住居の東は土坑と重複している。東西2.7m南北3.6mのゆがんだ台形を呈す。

II-151b号住居跡 (292-SH151b 図176,177)

H,I-28,29グリットにある。住居跡の南及び西辺を確認した。住居東部には16号溝が走りかなり壊されている。6の竈の口縁部には油煙が付着している。灯明具として使用された可能性がある。

II-154号住居跡 (292-SH154 図178)

J-30グリットにある。住居跡の北西隅を検出した。住居跡は方形を呈するとみられるが、大部分は調査区外である。

II-157号住居跡 (292-SH157 図179)

H-18グリットにある。住居南東部を調査、竈は幅0.5m奥行き1.6mで、石組みが見られる。出土遺物の中で、4の鉄製銅の存在は特筆される。銅の刃部分の図化はX線写真からおこしたものである。

2 竈穴状遺構

I-4号竈穴状遺構 (247-ST4 図180)

I-11,12グリットにある。東西3.4m南北1.6m深さ0.35mの規模である。底はほぼフラットで竈穴式住居跡に似るが竈、柱穴等は確認出来ない。

3 土坑

I-16号土坑 (247-SD16 図181,182)

L,M-4,5グリットにある。東西1.1m南北0.8m深さ0.3mである。北を水道敷設溝に切られる。

I-19号土坑 (247-SD19 図183,184)

K,L-4グリットにある。18,20号土坑と重複する。東西1.5m南北1.0mの楕円形で、深さは0.7mある。

I-20号土坑 (247-SD20 図185)

K,L-3,4グリットにある。18,19土坑に切られる。東西3.6m南北1.1mと細長い。深さは0.3mである。

I-26号土坑 (247-SD26 図186)

H-8グリットにある。東西4.5m南北1.5m深さ0.4mである。西隅が一段高い。

I-37号土坑 (247-SD37 図187)

K,L-5,6グリットにある。46号土坑と重複する。東西1.5m+ α 、南北1.5m深さ0.3mである。土層は自然埋没に見える。

I-51号土坑 (247-SD51 図188)

F-12グリットにある。8号住居跡と重複しこれを切る。直径0.8m深さ0.2m。

I-64号土坑 (247-SD64 図189)

E-8グリットにある。東西幅0.25m、北は建物基礎によって破壊されている。

I-67号土坑 (247-SD67 図190)

E-9グリットにある。東西4.45m南北0.55m深さ0.3mである。

I-76号土坑 (247-SD76 図191)

F-9グリットにある。東西幅1.5m、南北は不明。深さ0.35mの溝状の土坑である。

I-79号土坑 (247-SD79 図192)

G-4グリットにある。東西2.0m南北2.7m深さ0.2mである。底面はかなり凹凸がある。

I-84号土坑 (247-SD84 図193,194)

H-3,4グリットにある。東西4.0m南北1.1mの長方形で、深さ0.35mある。底面に多くの灰が認められる。

I-87号土坑 (247-SD87 図195~197)

H-3,4グリットにある。東西2.9m+ α 、南北1.7m、深さ0.8mを測る。土師質土器皿に混じって「東」と墨書された土器が2点出土している。

I-91号土坑 (247-SD91 図198)

H-5,6グリットにある。90号、92号土坑と重複。南北1.0m、東西2.5m+α、深さ0.15m。

I-92号土坑 (247-SD92 図199)

H-6グリットにある。91号土坑と重複し、92号土坑が新しい。土師質土器に混入する形で9世紀の蛇の目高台の畿内系縁輪陶器が出土している。

I-93号土坑 (247-SD93 図200)

F-7グリットにある。東西1.6m南北1.9m、長軸方位は北7度西の台形の土坑である。深さは0.6mある。

I-145号土坑 (247-SD145 図201)

F-14グリットにある。東西1.8m南北0.6m+α、深さ0.5mである。

I-146号土坑 (247-SD146 図202,203)

F-14グリットにある。145号、151号、152号土坑と重複する。南北2.5m東西1.7mの丸みを持った三角形である。

I-151号土坑 (247-SD151 図204)

G-14グリットにある。南北2.5m東西1.5m+α、深さ0.35mである。

I-154号土坑 (247-SD154 図205)

H-8グリットにある。東西0.9m南北0.6m+α、深さは0.35mある。南は新しい溝によって破壊されている。

I-164号土坑 (247-SD164 図206)

E-4グリットにある。163号土坑と重複する。東西0.8m南北0.4m+αの円形で、深さは0.3mである。

I-169号土坑 (247-SD169 図207)

G-5グリットにある。20号住居跡と重複し、住居よりは新しい。東西1.2m南北1.6mの楕円形で深さは0.35mである。

一次調査土坑群 (247-SK61 図209-220)

G、H-13グリットにある。149、153、150、137号土坑を含む5基の土坑群である。重複が激しく個々の土坑範囲と土器を確実に把握することが出来ない部分が多く土器も全体を一括して取り上げたものが多い。よって、土坑群として報告する。土層図から見ると149号土坑が一番古く、153号、150号の順に、また137号土坑が一番新しい。153号土坑は7号住居跡と重複し住居跡より古い。なお、土器図であるが各土坑に確実につくものは遺構番号を、一括して取り上げた土器はSK61としている。SD149の4は畿内系縁輪陶器。SD137の2には「東」の墨書がある。また、SK61の8にも「東」の墨書が、12の土器底には「片」、13の土器底には「半」の墨書がある。47の鉄器は鍔金とみられ希少例である。土器全体を見ると、時期幅はあまりないと考えられる。

II-29号土坑 (292-SD29 図221)

M-21グリットにある。30号、40号、28号土坑と重複する。東西2.1mである。

II-86号土坑 (292-SD86 図222)

K-20グリットにある。66号住居跡と重複し住居跡を切る。

4 炉跡

一次調査では17カ所の炉跡（SR）を確認している。これらは破壊されながらもその中に1号、2号、3号、7号、11号に鉄滓がある。また11号には轆の羽口が含まれる。これらはかつて鍛冶跡などがあったとみられるものである。なお、13号は轆の軸石があり轆の残骸とみられる。また、焼土が広がるだけのものもある。これら17カ所の遺構は同一の性格を持つとは考えにくい。このうち以下に報告するものは、炉跡がありそれが破壊された跡とみられるものの一部である。炉跡と呼んだが正確には炉跡が破壊された状態であり不適切な用語の使い方があつたがこれらの遺構をあえて炉跡と呼ぶ。

I-1号炉跡 (247-SR1 図223-225)

鉄滓が固まった状況にあり、またそばに木炭が出土している。鉄滓の分析によれば、製錬炉跡の可能性が高い。

I-2号炉跡 (247-SR2 図226)

炭化物ががたまっている。土器は散った状況にあるが鉄滓が2点含まれる。鍛冶跡があった可能性がある。

I-11号炉跡 (247-SR11 図227,228)

轆の羽口や鉄滓が多数出土している。鉄滓の分析によれば、精錬鍛冶跡があった可能性が高い。坩堝片に溶けて付着した金属物を分析したところ、鉄と鉛が主体で少し銅が含まれているという結果であった。（234ページ）

I-12号炉跡 (247-SR12 図229,230)

土器が散った状況で一部に焼土が見える。鉄滓の出土はなく鍛冶跡があったかどうかは不明である。

5 礎石 (図231)

K-17,18グリットにある。4点の大きな石ががたまっている。このうち図の一番下（南）の石はこの場所に置かれたものであり原位置の状態である。大きさ0.75m×0.48mの自然石で加工はない。周囲に5-20cmの石があるが、下には石は敷かれてない。石の下部は浅間B群石を含まない黒色土であり、石は古代の建物の礎石の可能性が高い。なお、この礎石とみられる石のそばにも石があるが、今や動いていると考えられる。

5 中近世

1 土坑

27号土坑 (247-SD27 図232)

J-8グリットにある。南北4.9m東西1.5m深さ1.2mである。土層の往記記録はないが写真で土層を見るとローームの層が途中にある。天井部が落ち込んだ様相である。地下式坑であろう。3の鉢の出土から中世の遺構と知られる。

30号土坑 (249-SD30 図233,234)

J-8グリットにある。南北4.2m東西2.7m深さ1.9mである。27号土坑と同じく土層記録はないが、写真には天井

部が落ち込んだ様子が見てとれる。3は山茶碗、5は東海系焼締陶器、6は軟質陶器の鍋である。これらの中世遺物の存在から、中世の地下式坑と考えられる。

203号土坑 (247-SI203 図235)

O 9グリットにある。南北1.0m東西0.65m深さ0.25mである。長軸方位は北3度西を向く。土師質土器皿と銭貨が3枚出土している。3枚ともかなり錆びているが、至道□□、永楽I IIIIが判読出来る。中世の土坑と考えられる。

2 大量出上坑 (247-SI201 図237～252)

P 12グリットにある。大量の銭貨が東西0.23m南北0.17m深さ0.08mの土坑中から出土した。土坑長軸は北54度西である。銭貨の多くは裏紐を通した銭輪状態で、いくつかのブロックになって錆びて付着していた。また、ばらになった銭貨(4201、4301など)が銭輪となったブロックの下部や横から出土した。銭輪となった、1ブロックで最も数が多いのは49枚である。整理の結果、一番鋳造が古い開元通寶(唐、621年)から、皇宋通寶(北宋、1038年)、洪武通寶(明、1368年)、永楽通寶(明、1408年)、朝鮮通寶(朝鮮、1423年)、宣徳通寶(明、1433年)など合計628枚である。銭貨の内訳は唐銭41枚、北宋銭429枚、南宋銭14枚、金銭1枚(正隆元寶、1157)、明銭130枚、朝鮮銭1枚、不明12枚である。宣徳通寶が一番鋳造が新しく、銭貨の埋納は15世紀中葉以降と考えられる。以下に出土した銭貨の拓本を載せる。なお、観察表は4桁の数字で表しているが、最初の2桁はブロックナンバーを表す。また、後ろ2桁はブロックごとの通し番号である。紐はプラントオナール分析でイネの葉との結果が出ている。(銭貨別一覧表182ページ、一覧表231～233ページ)

3 堀跡 (SM10,12 図253)

F,G,H,K-20,21グリットにある。二次調査北区と南区の北隅である。調査によって南北走向の堀跡及び東に向かう堀跡を確認した。南北走向の部分は北10度西を向く。堀幅2.2m～3.0m、深さ0.75～0.9mである。断面形は幾分ゆるやかな逆台形を呈する。H-20グリットで東に分岐した部分は、堀幅0.8m～1.2m深さ0.6m程度、K-21グリットで分岐した部分では、堀幅2.0深さ0.6mである。溝は古代遺構を切り、また覆土には二次堆積の浅間B群石を含み中近世の遺構と考えられる。

4 集石遺構 (図254)

J,K,L,M-23,24グリットにある。1号方形周溝遺構の方台部及び北溝の位置に南北方向の集石があった。石は5～60cm、15cm程度の大きさの石が多い。場所によって50cmほどの大きさの石が集まっているところがある。石の間や下から大型動物の足部や頭部の骨が出土している。集石の下部には0.6m～1.2m大の楕円形の土坑がある。土坑の深さは15cm～35cmである。平面図では集石の下に土坑を置いているが、これは集石を取り除いた後の様子である。また、集石セクション図の部分には、土坑セクションがないため土坑を入れていない。集石北部分の下は土坑がないが、この部分は方形周溝遺構の溝や他の溝と重複する場所のため土坑の調査記録はない。

V まとめにかえて

1 縄文時代

住居跡を1軒と土坑を検出した。土坑のうちI-181号やII-101号土坑は、土器を意図的に埋設した可能性が高い。また、II-1号土坑は土器が破片の状態で、その南で石棒を意図した乳棒状石器が出土し、祭祀行為を窺わせる。なお、一次二次調査を通じて出土した土器は、加賀利E 3ないし4式の特徴を有している。

2 古墳時代

二次調査で発見した1号方形周溝遺構は、在地の様式土器とともに北陸南西部の影響を受けた土器が出土している。「5の字」は隼の形態や口縁部の縦凹線、胴部外面の粗い刷毛調整、内面の鋭利などの技法も似ている。これらの土器は、北陸の上層を周知しているものが製作したものと思われる。浅間C経石降下以後の、古墳時代でも比較的古い段階に位置づけられる。

3 飛鳥・奈良・平安時代

一次二次調査を通じて出土した土器を大きく見ると3段階に分けられる。

第1段階

第1段階のはじめの土師器壺は、器内が厚く長胴で外面を縦方向に匏筒りする。土師器杯は、口縁が有段なものや段がないものと2タイプがある。有段口縁杯は、段表現を沈澱で行うものが多い。両者とも次第に流量が小型化する傾向にある。土師器瓶もこの段階まで確認できる。須恵器は、飛鳥京編年の杯Hがみられる。たちあがりは短く内傾し、蓋は梗があるものとなしいとがある。II-82号住、I-101号住などがある。

土師器が大きく変わるのは、半球形で口縁が内傾する杯の登場とともにである。有段口縁杯は姿を消し、流量の小さくなった段のないタイプの杯は少数となる。土師器の壺は器高が減少傾向で、ついで胴部最大径が上の方にあり、胴上部を斜め匏筒りする土器も現れる。須恵器は碗形の杯Gが盛行する。底部は不定方向匏筒りないし回転匏筒りで、底部の端が丸みを帯びている。壺は乳瓶状握みが1点確認できる。この頃から高盤や鉄鉢形土器・壺が登場する。特に高盤の出土量が群を抜いている。I-12号住、II-15号住などがある。

次の段階になるのは、やや漸移的である。半球形の土師器杯は口縁が立ち気味或いは開き気味となる。平底で内面に暗文がある土師器も登場する。壺は器内がやや薄くなり、口縁が大きく外反ないし外傾する。須恵器の杯は底部が平らで、挽起こしや不定方向匏筒りである。I-8号住、I-11号住などがある。

第1段階は、7世紀はじめから8世紀前半までの土器変遷がみられ、集落が継続していると考えられる。

第2段階

土師器壺の頸部はコの字状、杯は体部を指すさへ、底部匏筒り調整である。須恵器杯の体部は比較的深く、高台もしっかりしている。9世紀後半と考えられる。縁輪陶器は、釉薬の色が淡く高台に削り出した円盤状で、1点蛇の目高台がある。その特徴から9世紀の畿内産とみられる。黒色土器の存在も特筆される。内面を篋煮し黒色処理をしている。器形は杯が多く、皿や碗もみられる。杯は底部回転糸切り無調整の他、糸切り離し後に底部や体部下半を匏筒りした個体がI-17土坑群やI-7号住居跡にある。

第3段階

第3段階は酸化焰焼成でロクロ整形の皿に代表される。ややざつと胎土で灰白色を呈するものが大部分である。黒灰はなく堀で焼いたと推定される。底部は静止糸切りが主体で回転糸切りは比較的少ない。大型の杯も静止糸切りと回転糸切りとがある。碗は足高高台が主体である。これらの土器は技術的には須恵器であるが、前段階と

は様相が異なり、各地で土師器と呼称される。しかし、これらを土師器と呼ぶと古墳時代以来の非クロロの土器と系譜が同一であるような誤解を招くため、土師質土器と本報告書では呼ぶ。

土師質土器に羽釜・土釜・灰輪陶器・黒色土器が伴件する。灰輪陶器は虎渓山1号窯式ないし丸石2号窯式である。黒色土器は、外面も黒色処理した黒色土器Bも確認できる。羽釜は胴が三角形で胴部が丸みを帯び、外面は縦方向に施釉される。土釜は大型で、胴部外面は縦方向の施釉がある。灰輪陶器の年代観では10世紀後半から11世紀、羽釜や土釜で考えると11世紀まで下る。その中でI-51号住、I-25号住、I-4号堅穴などは古段階に、杯や皿が比較的浅く回転未切りが多くなるI-27号住、I-47号住、II-22号住などは新段階に位置づけられる。第3段階は住居跡が多く、この時期に規模の大きな集落が形成されたと考えられる。

本遺跡の古代の特徴としていくつかの点があげられる。

- 1 和同開珎の出土。本市では引間遺跡の2号古墳の玄室、藤野堂遺跡第II地区105号住居跡で発見以来3例目、集落で2例目である。第2段階のI-19号住居跡の覆土中で3枚に割れての出土である。
- 2 畿内系緑釉陶器の存在。第2段階での出土は2点であるが、第3段階の遺構からの出土量が多く、かなり9世紀に入ってきている。
- 3 黒書土器の存在。第2段階で「片」「東」「半」「貴」などがみられる。本遺跡地付近は古代において、上野国片岡郡であったとされ「片」は片岡郡の片の可能性がある。
- 4 礎石の存在。古代の礎石が1点で時期を特定することはできない。
- 5 多量の鉄滓の出土。第1段階で1点、第2・第3段階が多い。第1段階は橢圓形（I-8住-16）であるので、8世紀前半に精錬ないし鍛錬鍛冶がおこなわれていたとみられる。8世紀後半から9世紀前半までの土器はなく空白期である。続く9世紀の後半には通常の集落の様相を呈さない。「宝物」としての和同開珎や出土例の少ない畿内系緑釉陶器もある。鉄滓の自然科学分析では、9世紀に精錬鍛冶を行っていたとの指摘もある。瓦の出土は第2段階に始まり、3段階の住居跡で多い。二次調査で検出した礎石と瓦が関連すると考えれば、第2段階に等しい官衙などの公的施設があった可能性もある。

10世紀前半頃は土器量が少なく、10世紀後半から11世紀の土器は中世的である。この時期には鉄滓の出土が多い。鉄滓の金属学的分析では鍛冶遺構と考えていたSR1と堅穴住居跡から鍛錬滓が発見されている。大澤氏が指摘するように製鉄から鍛錬まで一環した作業体制をとっていたと考えられる。

4 中世の遺構・遺物について

1 地下式坑

一次調査で27号、30号、47号土坑と3基の地下式坑を発見した。27号土坑からは軟質陶器の鉢が、30号土坑からは山茶碗と軟質陶器鉢が出土している。山茶碗は12世紀に位置づけられ、軟質陶器鉢も古相である。

2 大量出土銭

一次調査の小さな201号土坑から628枚の銭貨が出土した。銭貨は裏面に通した状態、いわゆる銭磨であったが全て裏面に通ったのではなく、ばらばらなものもあった。銭貨は北宋銭と明銭が多く、永樂通寶（明 1408）や宣徳通寶（明 1433）などがあることから、15世紀中葉以降に埋納されたと考えられる。銭貨が大量に出土した例として、本市においては下佐野遺跡寺前地区136号土坑での5992枚が有名である。下佐野遺跡の銭貨は、銭磨の状態であった。銭磨は開元通寶から宣徳通寶まで、元豐通寶などの北宋銭が際だって多い。また永樂通寶などの明銭がそれに続く。こうした傾向は、豊岡後塚遺跡で発見した出土銭と似ている。

注1 「引間遺跡」高崎市教育委員会 1979

注2 「藤野堂遺跡(Ⅱ)」群馬県歴史文化財調査事業団 1990

注3 「下佐野遺跡」群馬県歴史文化財調査事業団 1989



図1 周辺遺跡位置図

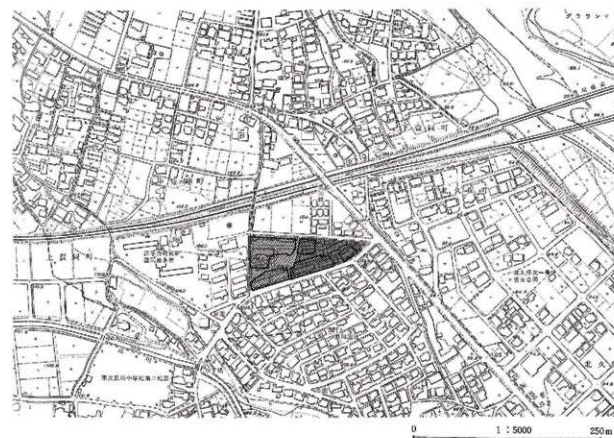


図2 豊岡後原Ⅰ・Ⅱ遺跡位置図

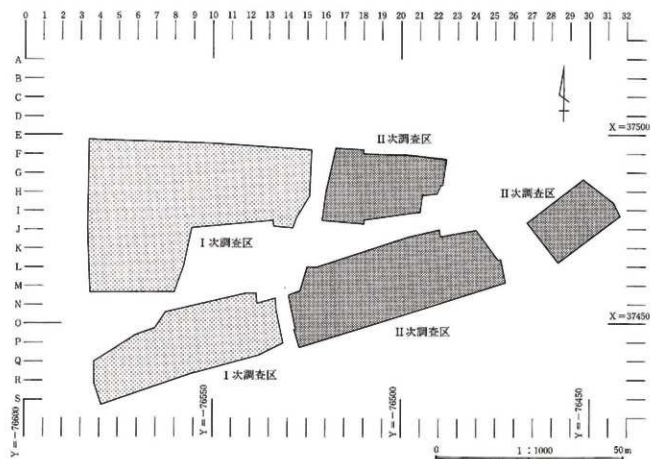


図3 調査グリッド設定図

I-1号縄文住居跡 (I, J-7, 8)

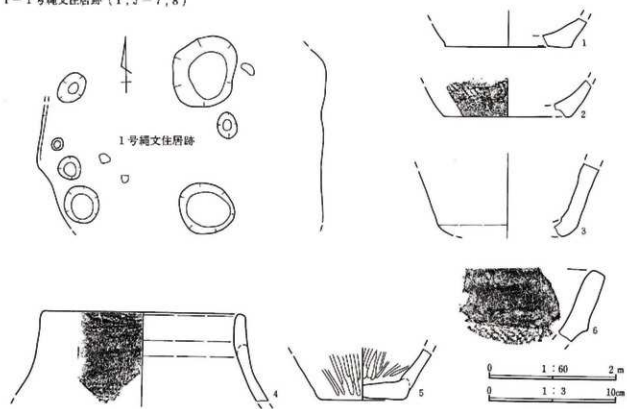


図4 I-1号縄文住居跡遺構遺物図

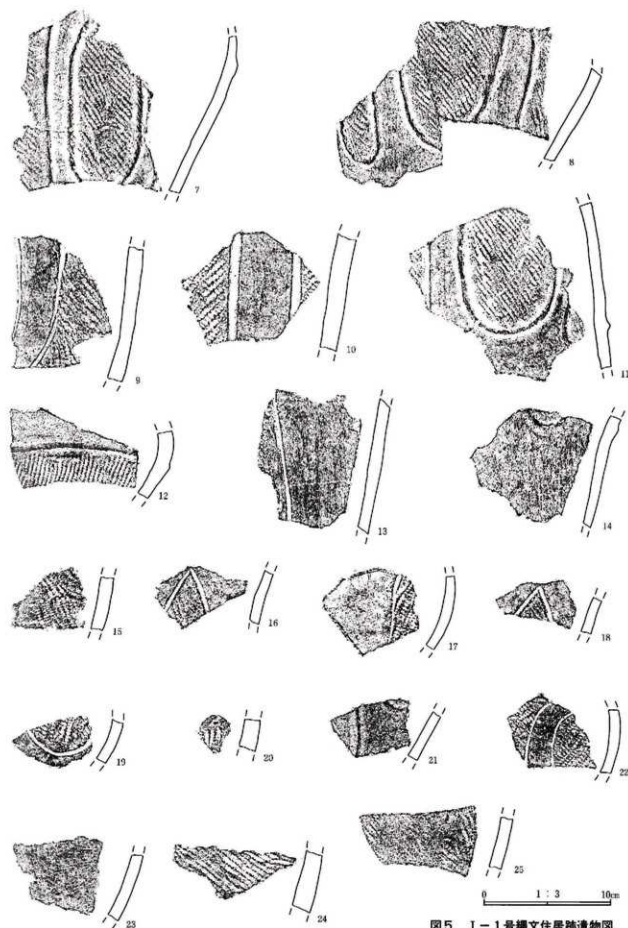


図5 I-1号縄文住居跡遺物図

I-101号土坑 (H-6)

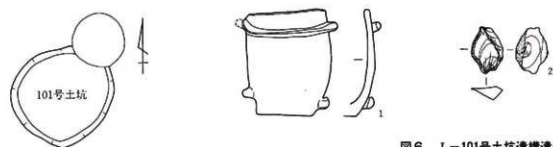


図6 I-101号土坑遺構遺物図

I-181号土坑 (G-12)

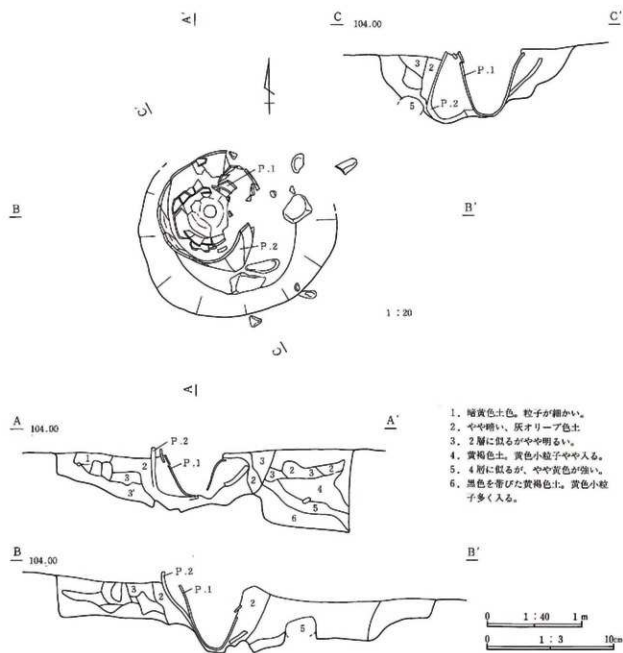


図7 I-181号土坑遺構遺物図

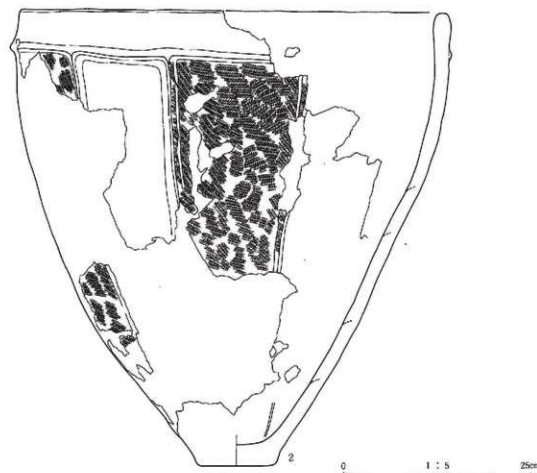
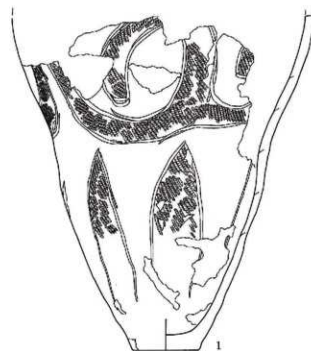


図8 I-181号土坑遺物図

II-1号土坑 (I-23)

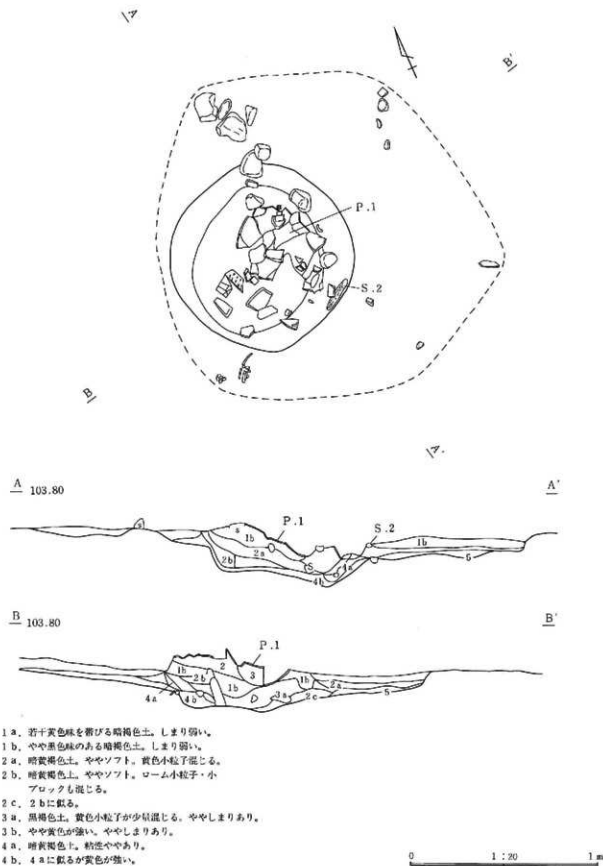


図9 II-1号土坑遺構図

II-1号土坑 (I-23)

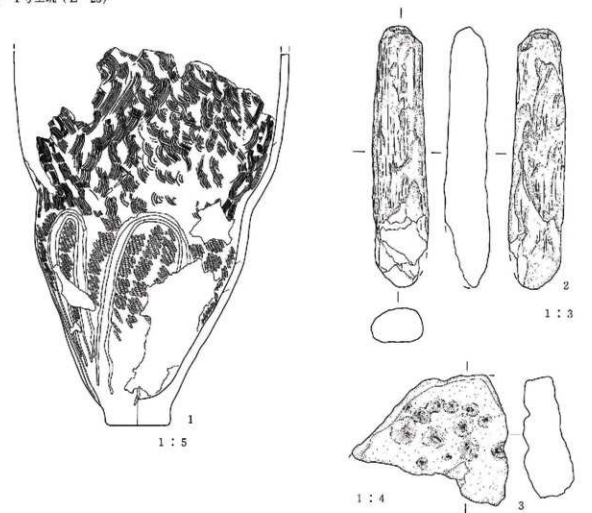


図10 II-1号土坑遺構図

II-42号土坑 (I-21)

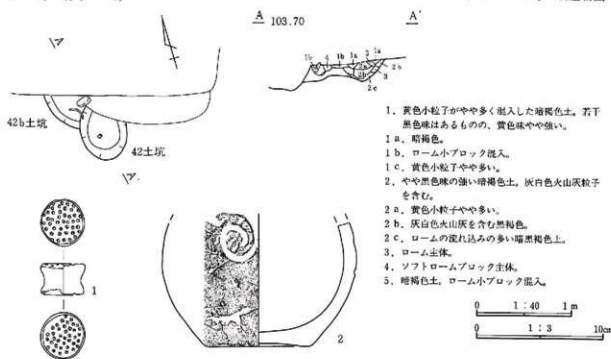


図11 II-42号土坑遺構図

II-60号土坑 (K, L-23)

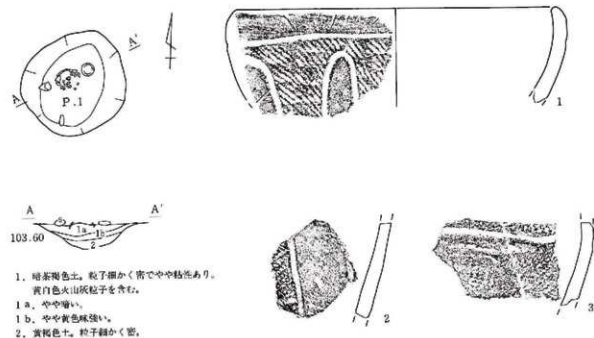


図12 II-60号土坑遺構遺物図

II-101号土坑 (F, G-19)

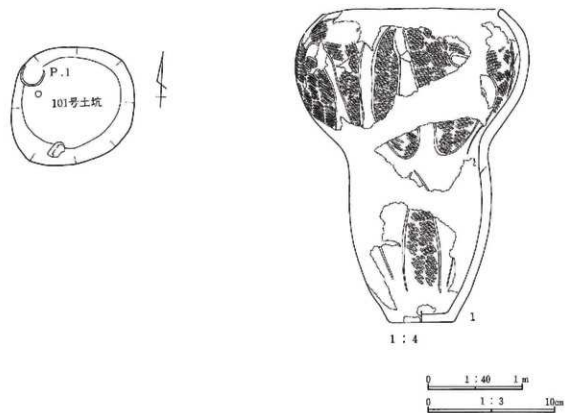


図13 II-101号土坑遺構遺物図

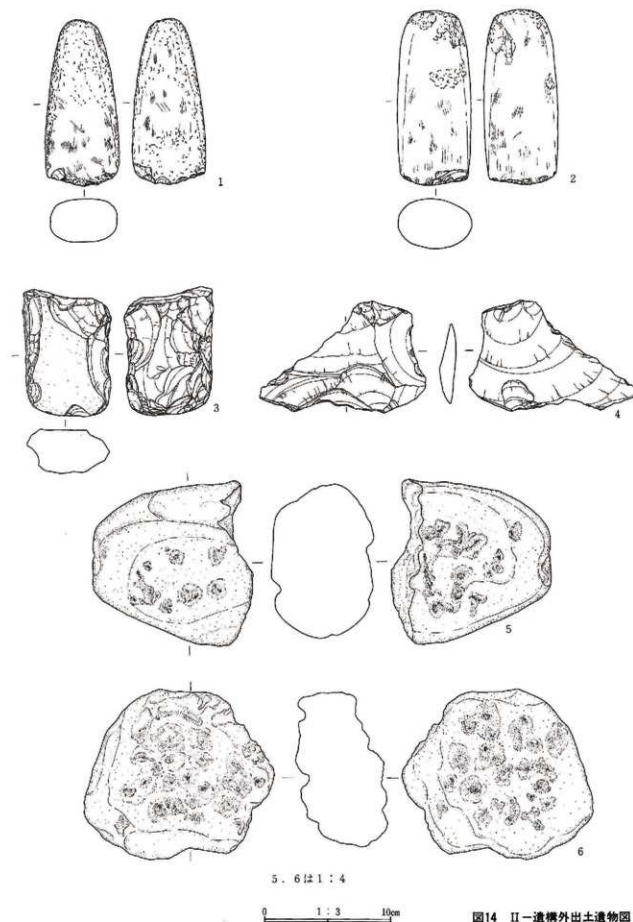


図14 II-遺構外出土遺物図

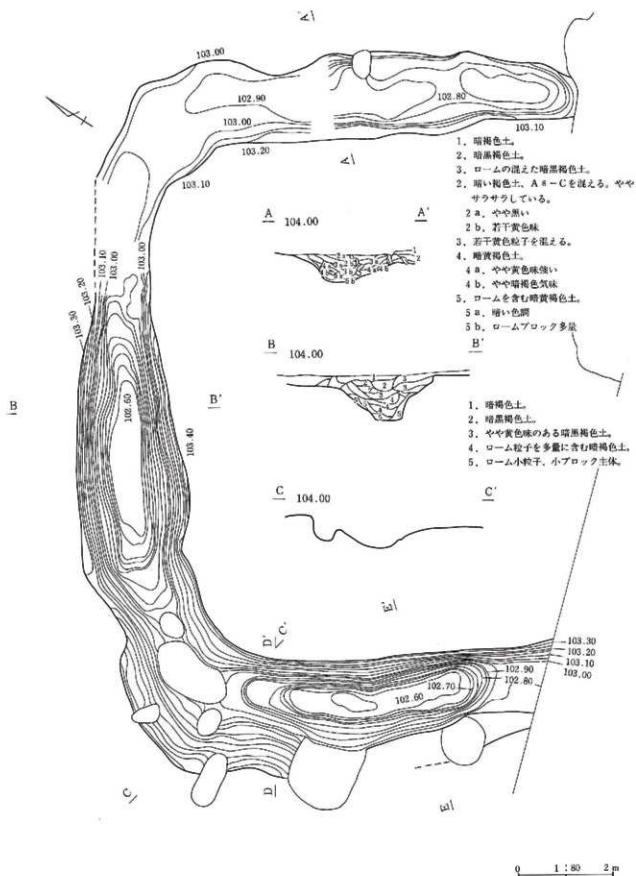


図15 II-1号方形周溝基遺構図

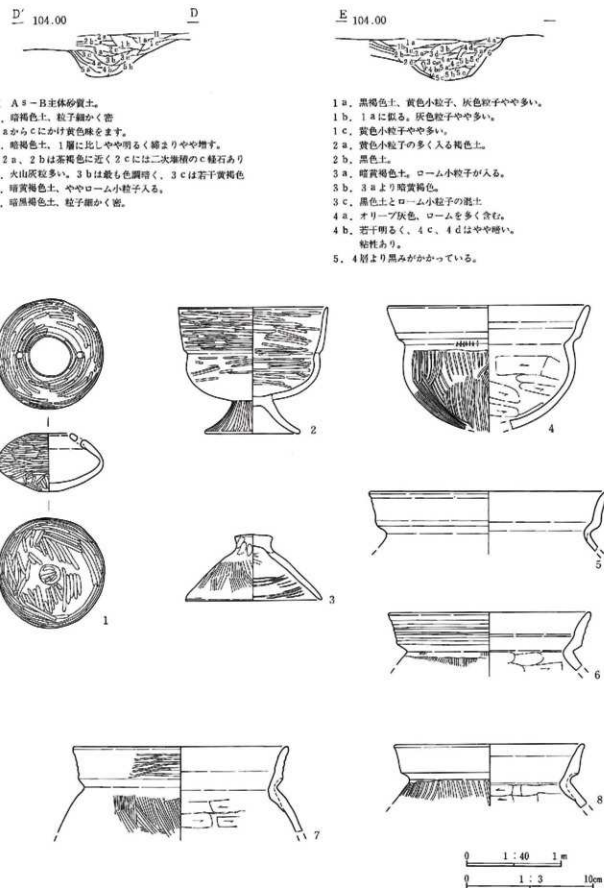


図16 II-1号方形周溝基遺構遺物図

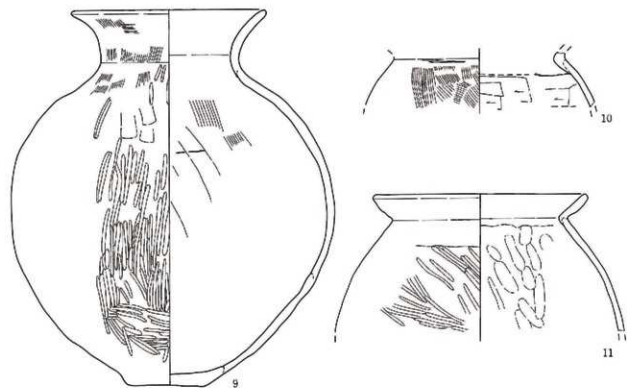


図17 II-1号方形周溝墓遺物図

I-1号住居跡 (G-10, 11)

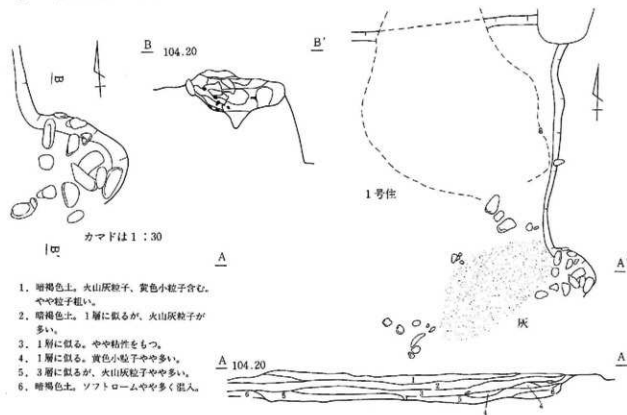


図18 I-1号住居跡遺構遺物図

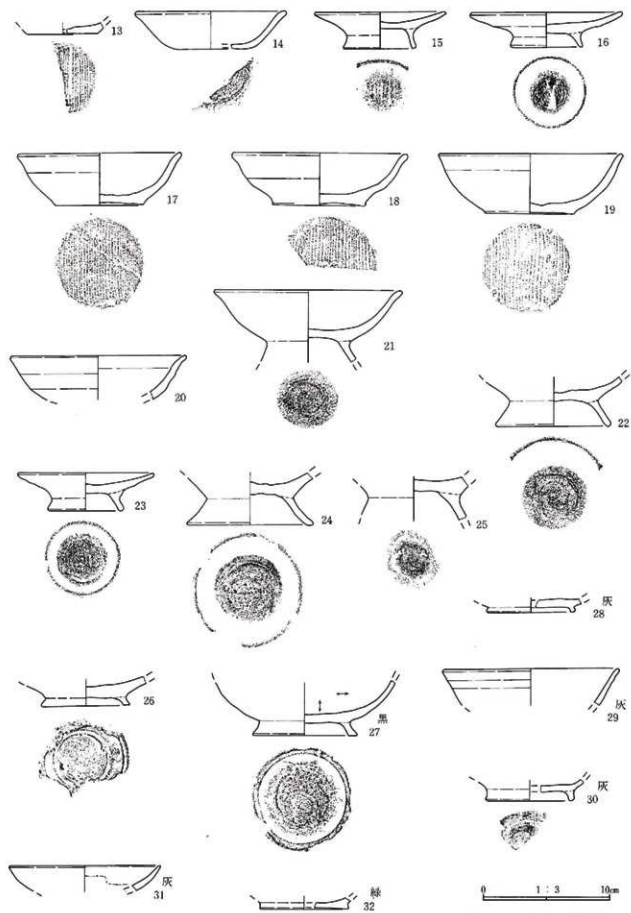


图19 I-1号住居跡遺物図

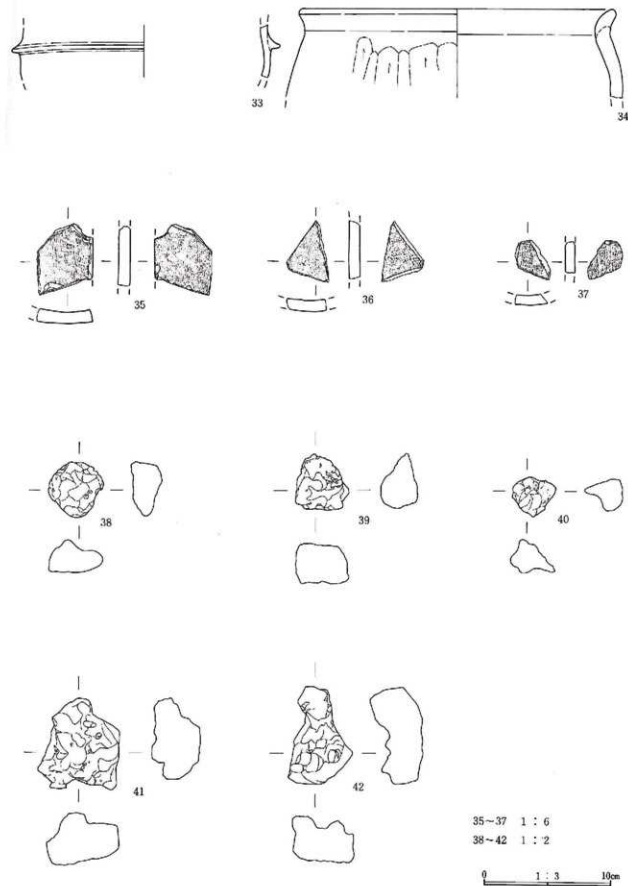


图20 I-1号住居跡遺物図

I-2号住居跡 (G, H-9, 10)

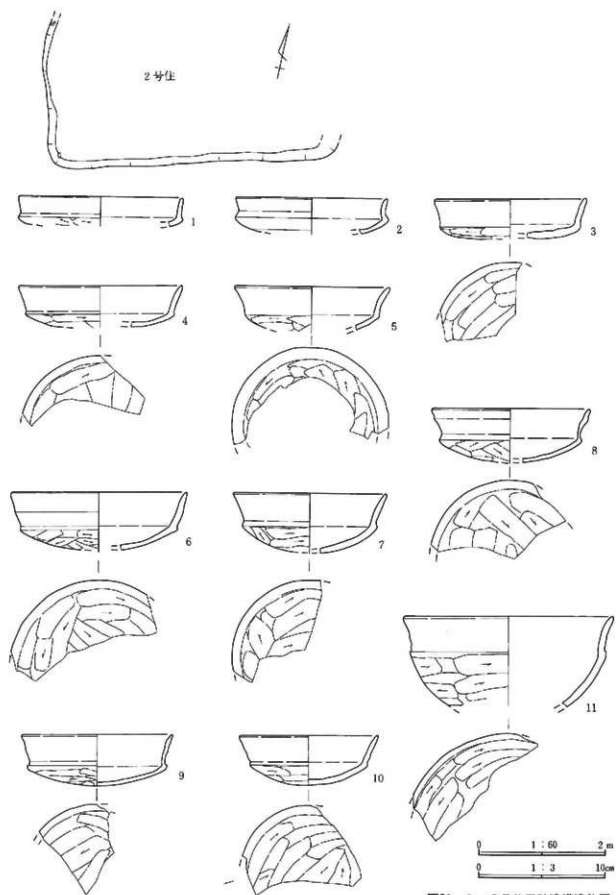


图21 I-2号住居跡遺構遺物図

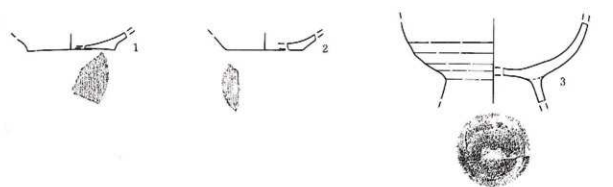


图22 I-3号住居跡遺物図

I-4号住居跡 (G-14)

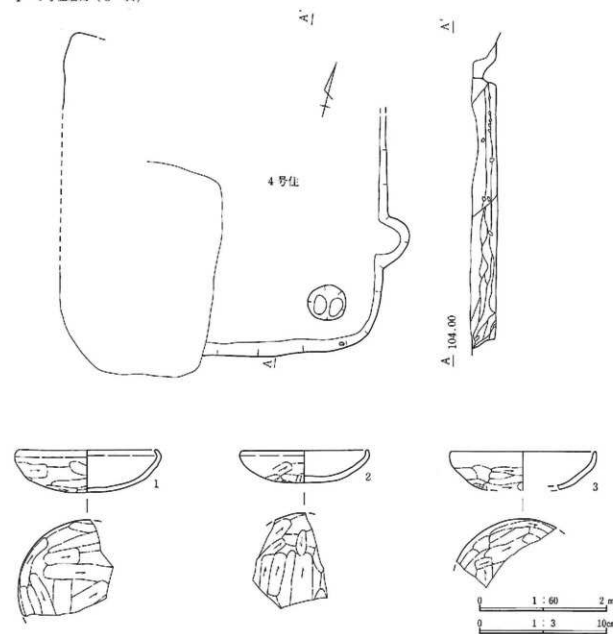


图23 I-4号住居跡遺構遺物図

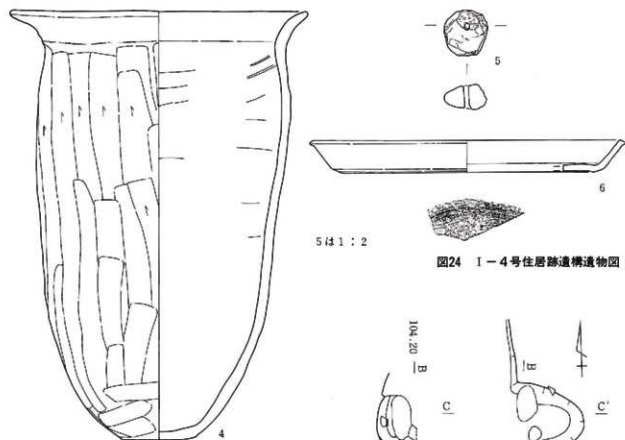
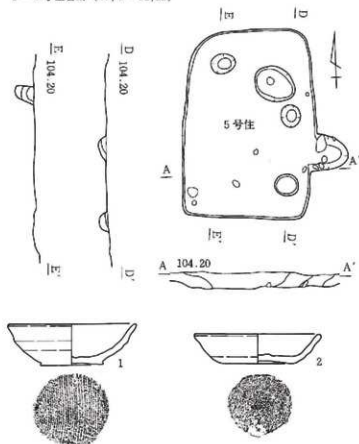


図24 I-4号住居跡遺構遺物図

I-5号住居跡 (H, I-11, 12)



カマドは 1:30

- 1-1. 赤褐色土。薄オレンジの焼土粒。c 軽石粒をやや多量に含む。
- 1-2. 上層より焼土粒。c 軽石粒が少ない。
- 1-3. 赤褐色土。少量の焼土粒。c 軽石粒。炭化粒を含む。
- 1-4. 赤褐色土。ローム混土層。焼土粒を微量含む。
- 1-5. 暗茶褐色土。粒子細かく。若干炭を含んでパサパサしている。
- 2-1. 灰茶褐色土。粒子細かく。灰白色の灰を多量に含む。
- 3-1. 明褐色焼土。粒子細かく明るい赤色。パサパサしている。
- 3-2. 暗褐色土。多量の焼土粒。焼土ブロックを含む。焼土は明褐色。

図25 I-5号住居跡遺構遺物図

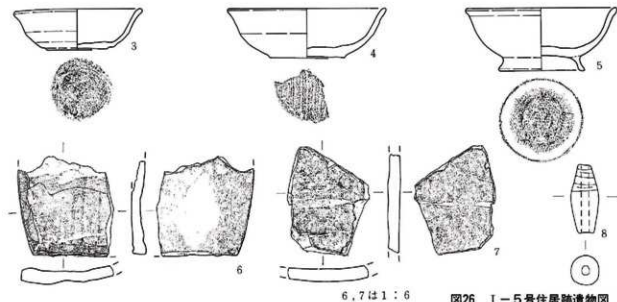
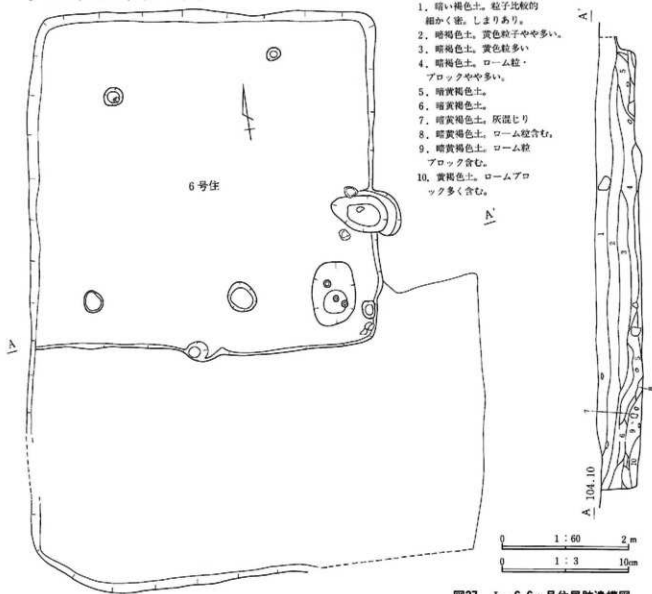


図26 I-5号住居跡遺構遺物図

I-6.6a号住居跡 (G, H-11, 12)



1. 暗い褐色土。粒子比較的に細かく密。しまりあり。
2. 暗褐色土。黄色粒子やや多い。
3. 暗褐色土。黄色粒多い。
4. 暗褐色土。ローム粒。ブロックやや多い。
5. 暗茶褐色土。
6. 暗茶褐色土。
7. 暗茶褐色土。灰混じり。
8. 暗茶褐色土。ローム粒含む。
9. 暗茶褐色土。ローム粒。ブロック含む。
10. 暗茶褐色土。ロームブロック多く含む。

図27 I-6.6a号住居跡遺構遺物図

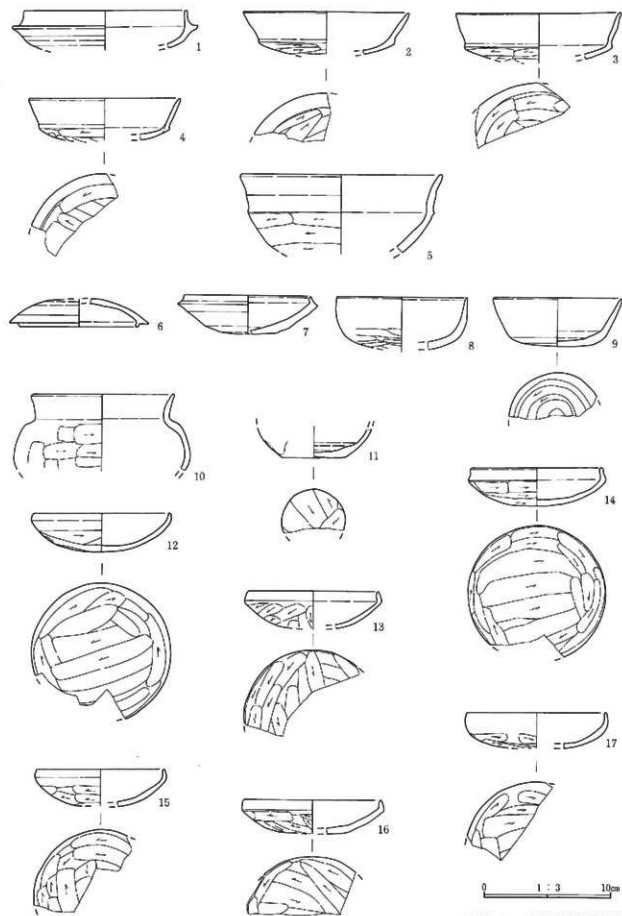


图28 1-6号住居跡遺物図

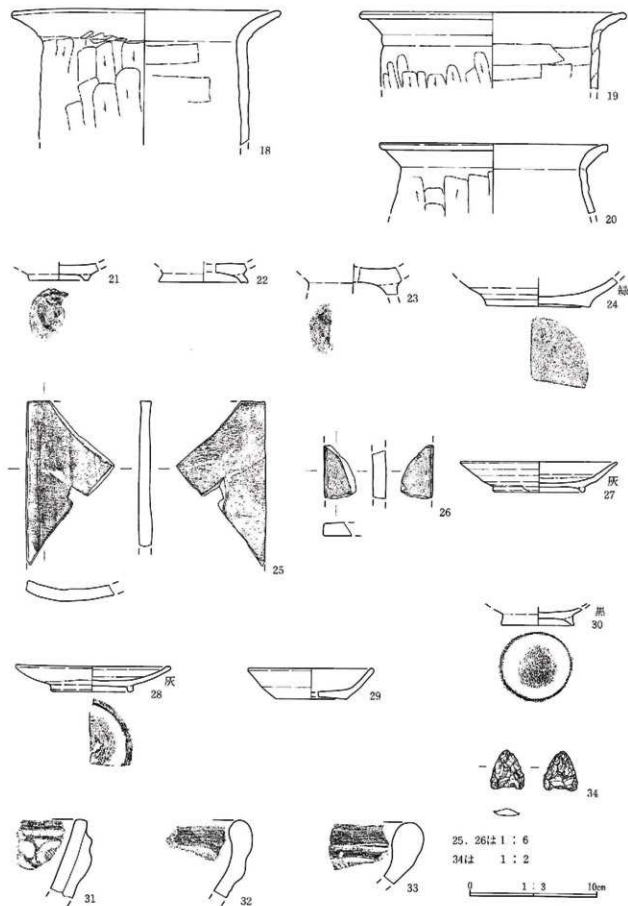


图29 1-6号住居跡遺物図

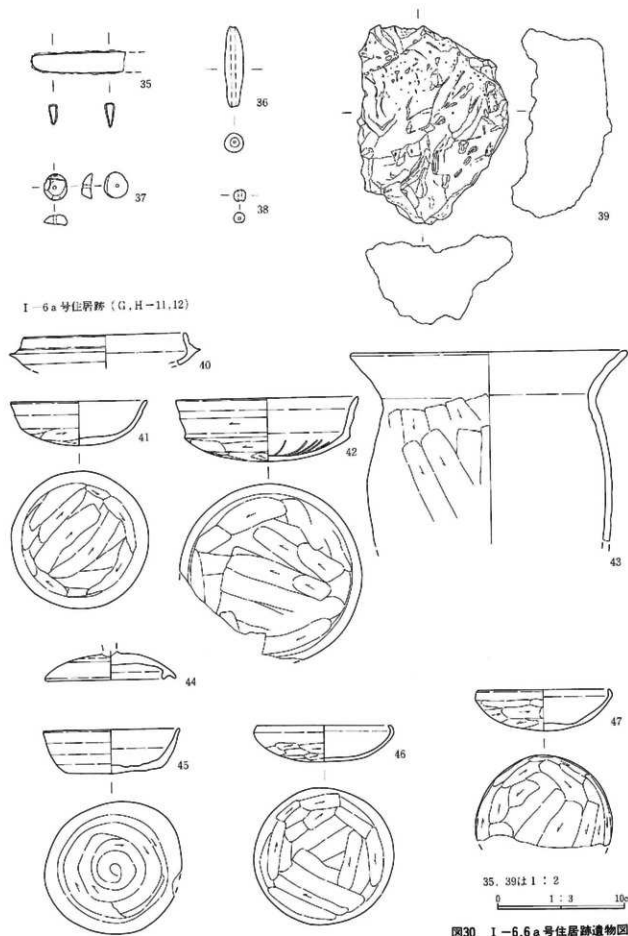


図30 I-6.6a 号住居跡遺物図

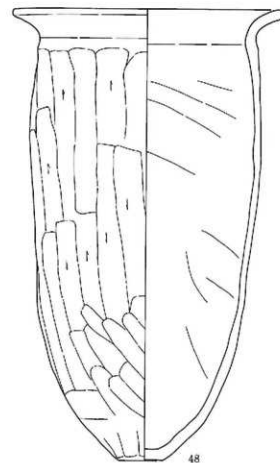
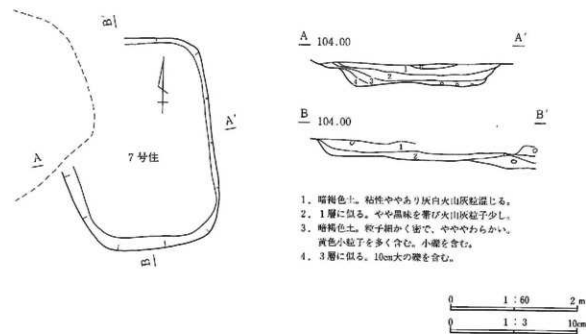


図31 I-6a 号住居跡遺物図

I-7 号住居跡 (G-13.14)



1. 暗褐色土。粘性ややあり灰白火山灰粘着する。
2. 1層に似る。やや黒味を帯び火山灰粘着少し。
3. 暗褐色土。粘土質かく密で、やややわらかい。黄色小粒了を多く含む。小礫を含む。
4. 3層に似る。10cm大の礫を含む。

図32 I-7 号住居跡遺物遺物図

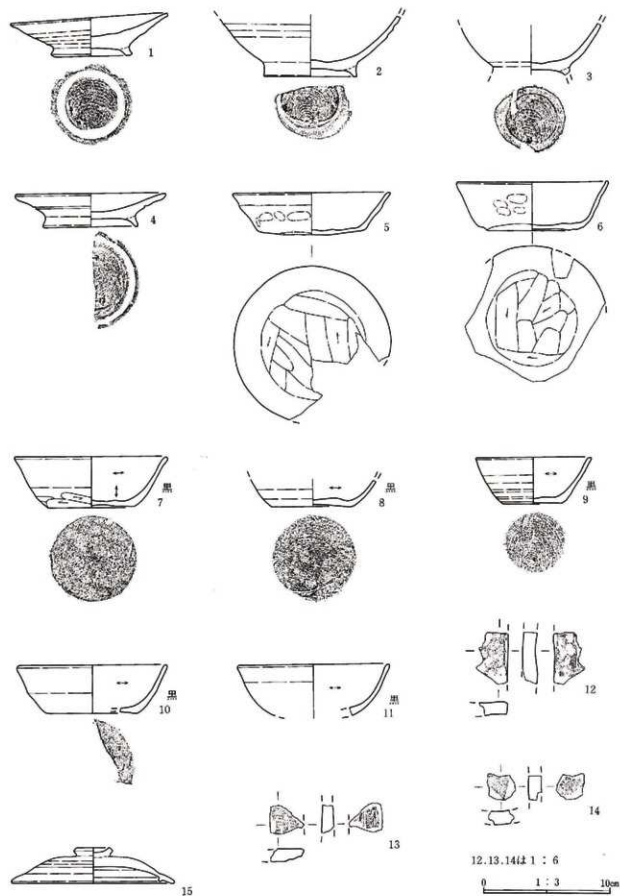


図33 I-7号住居跡遺物図

I-8号住居跡 (F-12)

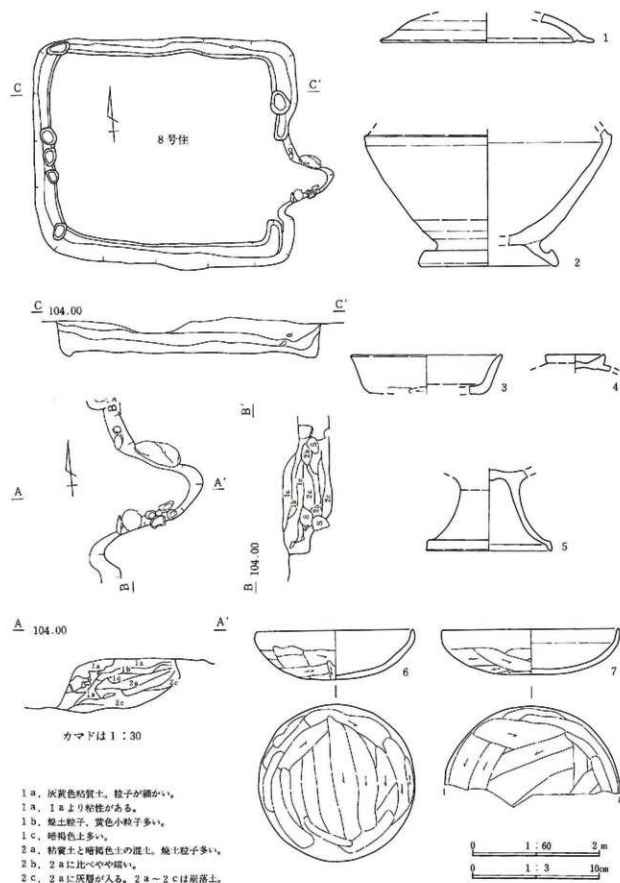


図34 I-8号住居跡遺物図

- 1 a. 灰黄色粘質土。粒子が細かい。
 1 a. 1 a より粘性がある。
 1 b. 粘土粒子。黄色小粒子多い。
 1 c. 暗褐色土多い。
 2 a. 粘質土と暗褐色土の混土。焼土粒子多い。
 2 b. 2 a に比べやや暗い。
 2 c. 2 a に灰層が入る。2 a-2 c は崩落土。

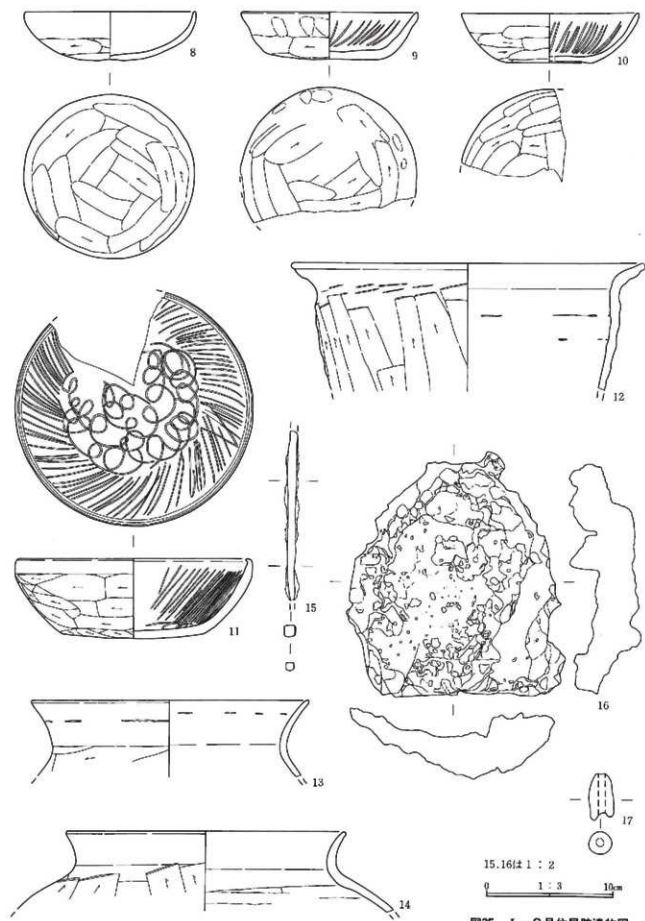
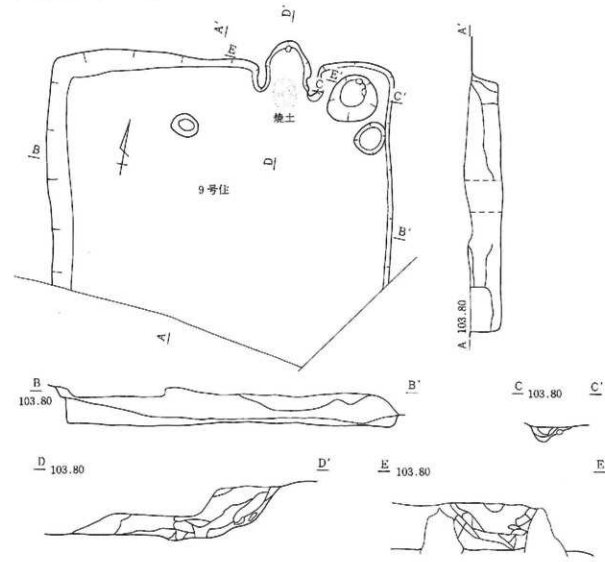


図35 I-8号住居跡遺物図

I-9号住居跡 (H-13.14)



カマドセクション図DとEは1:30

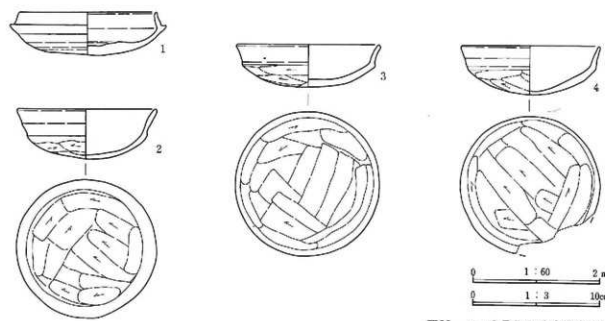


図36 I-9号住居跡遺物図

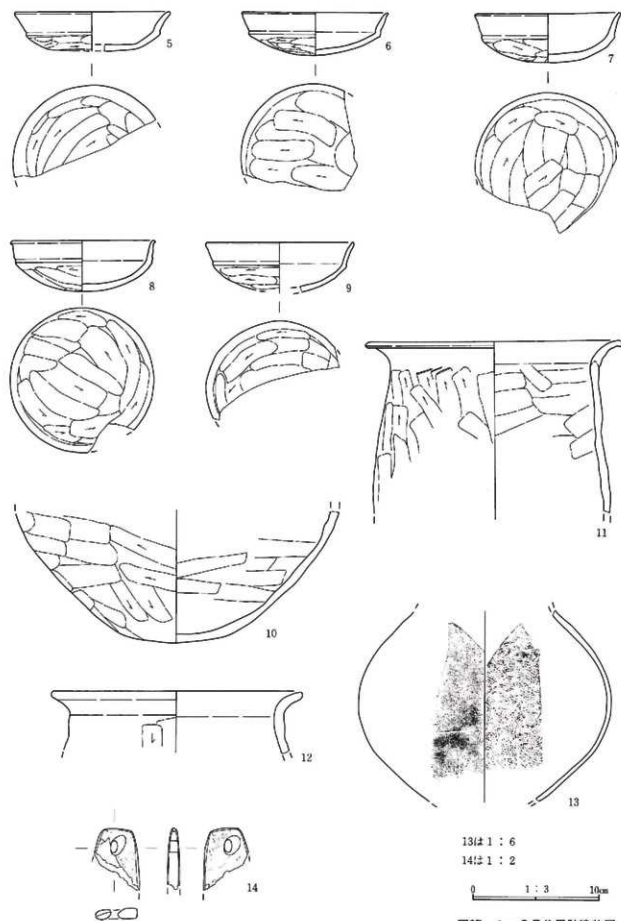


图37 1—9号住居跡遺物図

I—10号住居跡 (G—13)

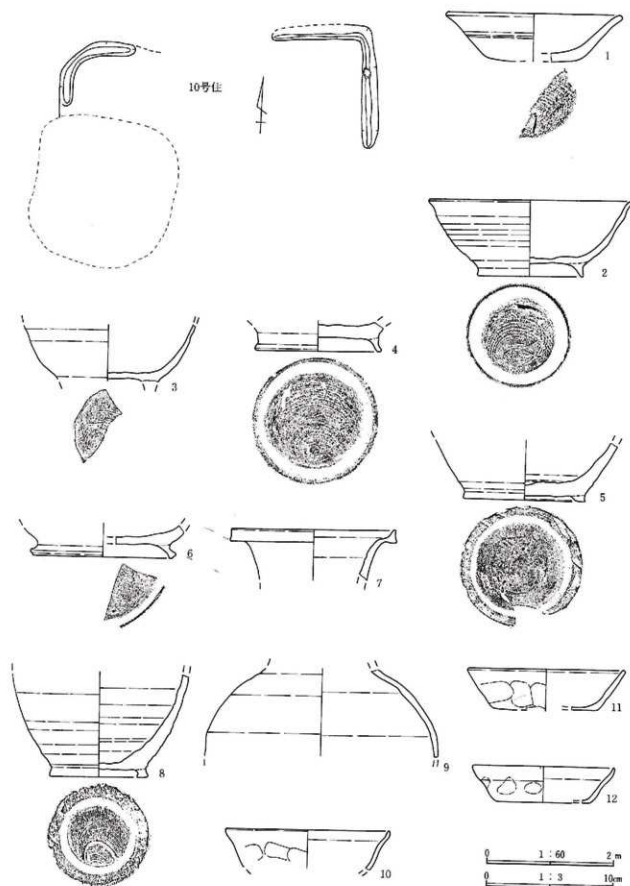


图38 I—10号住居跡遺物構造図

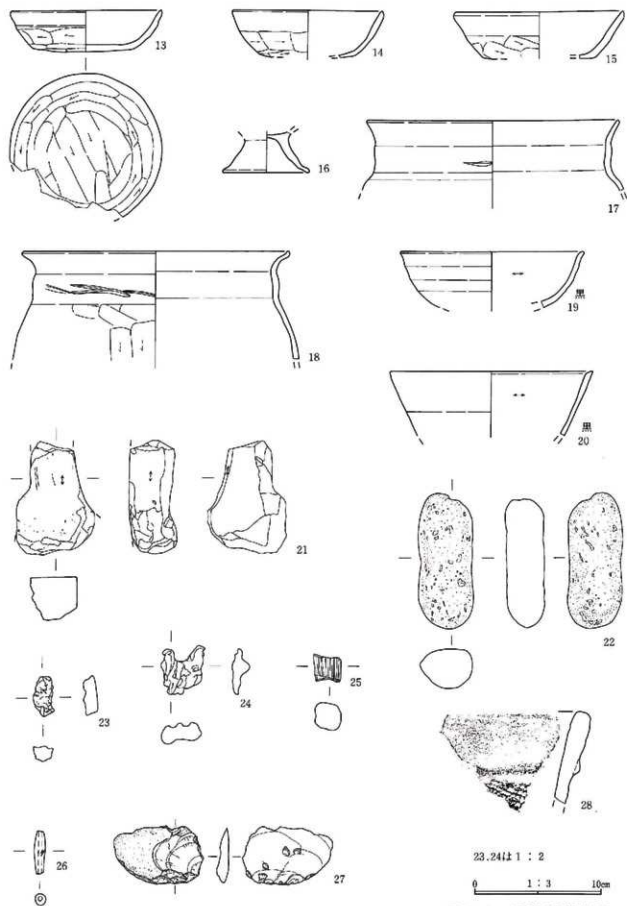


図39 I-10号住居跡遺物図

I-11号住居跡 (H, I-5)

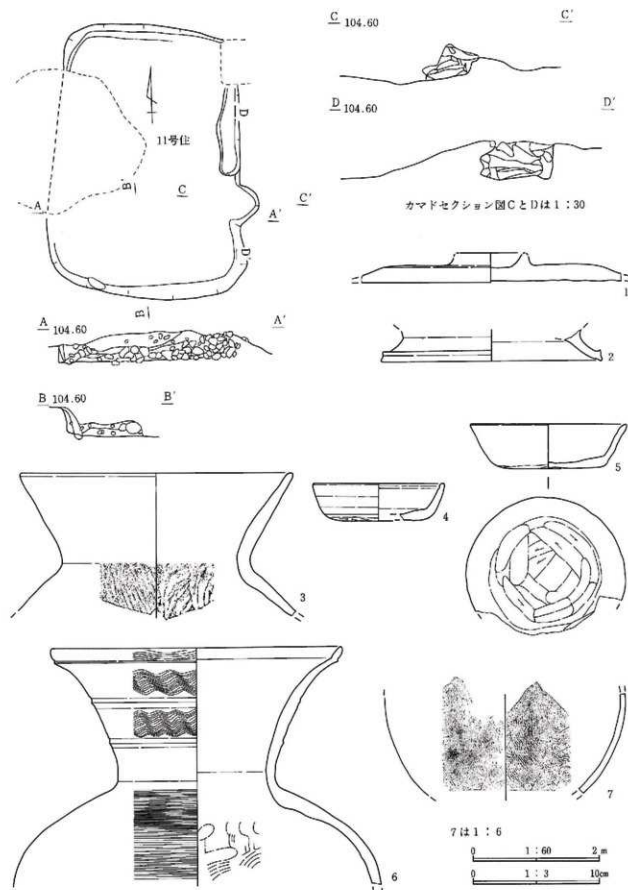


図40 I-11号住居跡遺物図

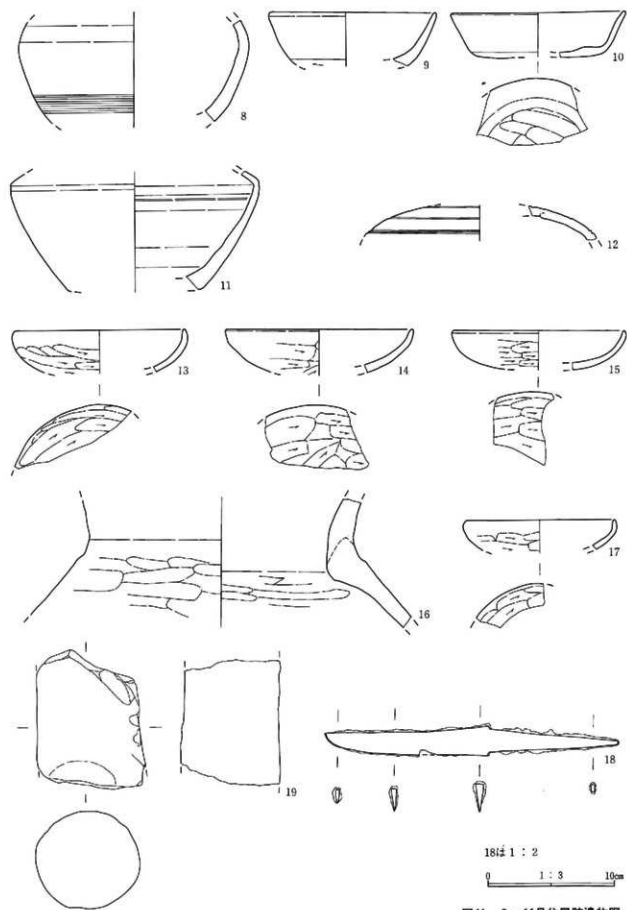


図41 I-11号住居跡遺物図

I-12号住居跡 (J-4, 5)

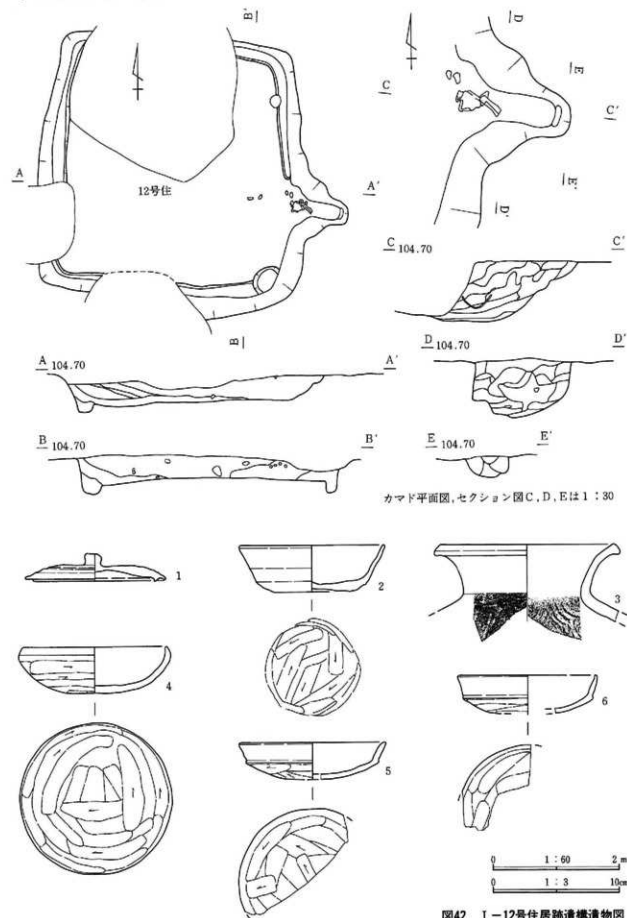
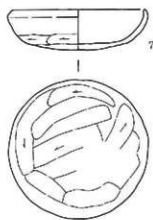


図42 I-12号住居跡遺物遺構図



I-13号住居跡 (J-6)

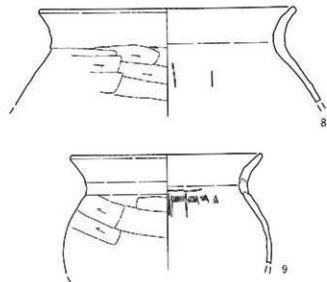
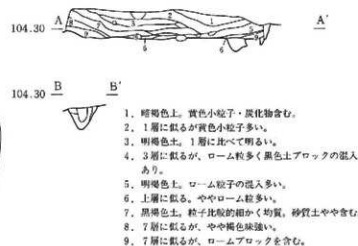
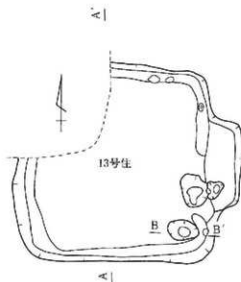


図43 I-12号住居跡遺物図



1. 暗褐色土。黄色小砂子・炭化物含む。
2. 1層に載るが黄色小砂子多い。
3. 暗褐色土。1層に比べて明るい。
4. 3層に載るが、ローム较多く黒色土ブロックの混入あり。
5. 暗褐色土。ローム砂子の混入多い。
6. 上層に載る。ややローム粒多い。
7. 黒褐色土。砂子比較的粗かく均質。砂質土やや含む。
8. 7層に載るが、やや褐色味強い。
9. 7層に載るが、ロームブロックを含む。

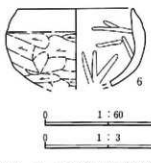
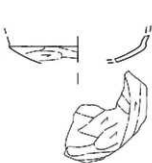
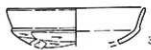
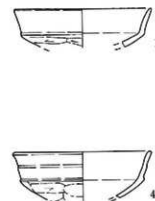


図44 I-13号住居跡遺物図

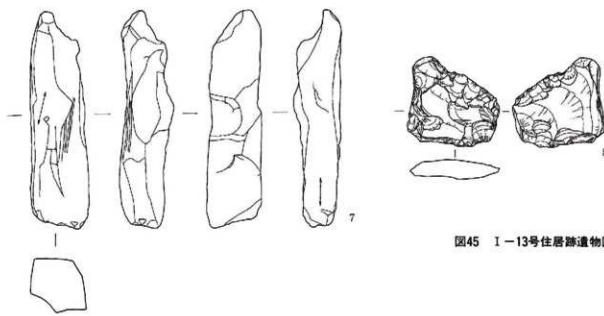


図45 I-13号住居跡遺物図

I-14号住居跡 (L, M-7, 8)

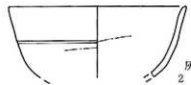
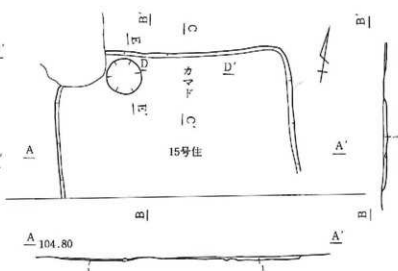
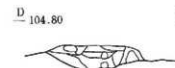
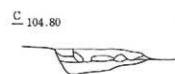


図46 I-14号住居跡遺物図

I-15号住居跡 (K, L-5, 6)



1. 暗褐色土。砂子は比較的細かく、ロームブロック。ローム小砂子が混入する。

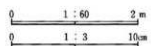


図47 I-15号住居跡遺物図

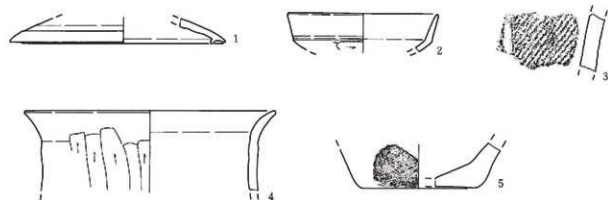


図48 I-15号住居跡遺物図

I-16号住居跡 (K-4, 5)

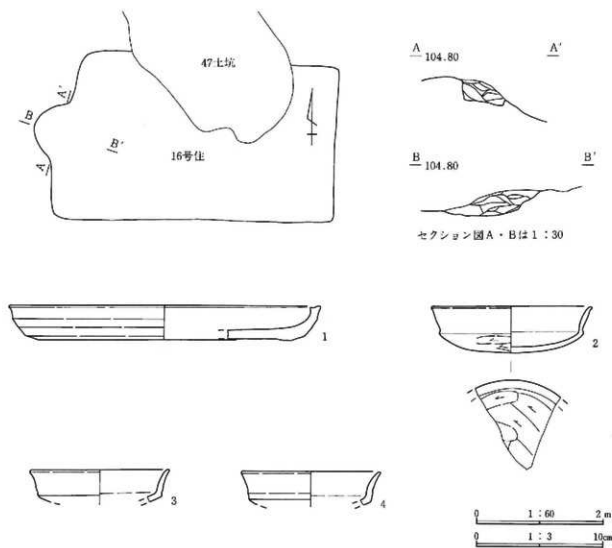


図49 I-16号住居跡遺物図

I-17号住居跡 (J, K-4, 5)

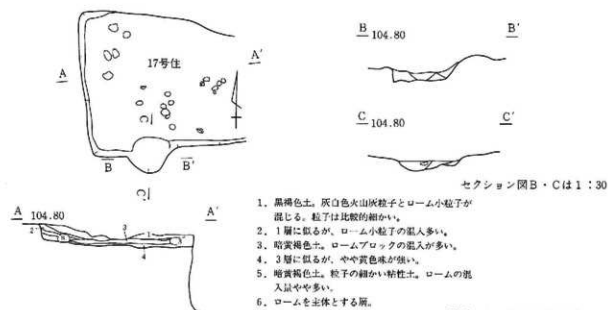


図50 I-17号住居跡遺物図

I-18号住居跡 (F, G-5)

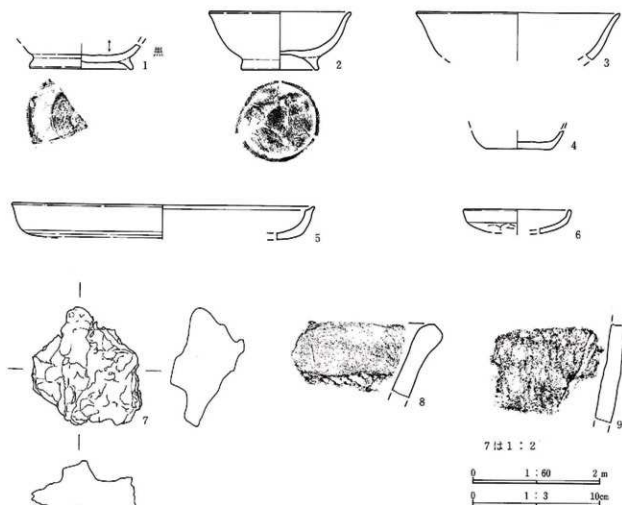


図51 I-18号住居跡遺物図

I-19号住居跡 (F, G-5)

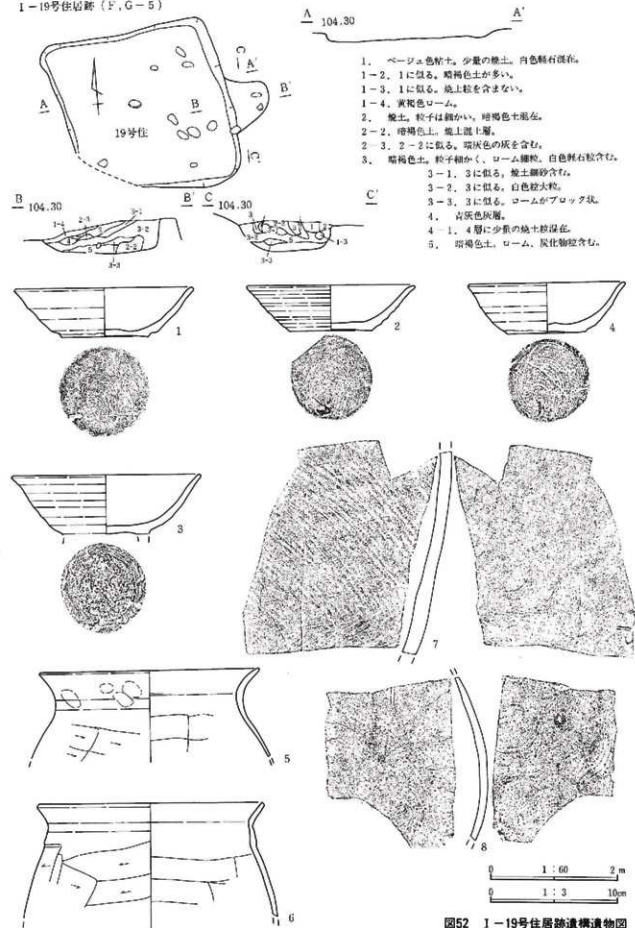


図52 I-19号住居跡遺構遺物図

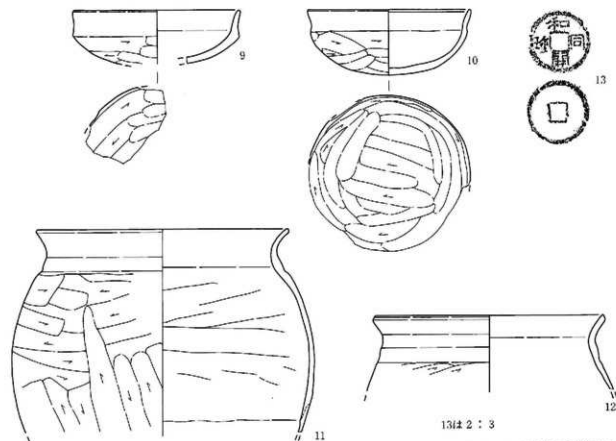


図53 I-19号住居跡遺物図

I-20号住居跡 (G-5)

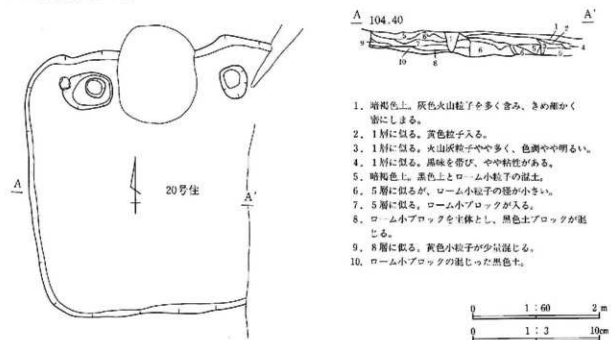


図54 I-20号住居跡遺構遺物図

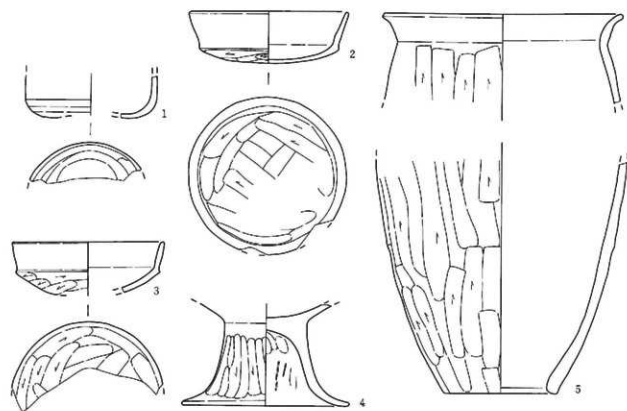
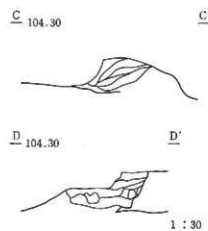
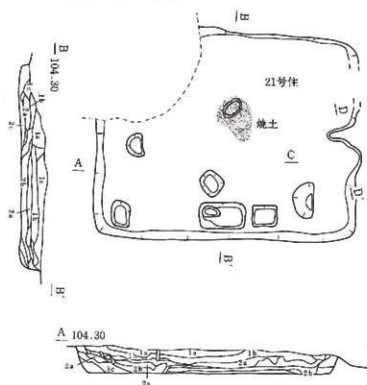


図55 I-20号住居跡遺物図

I-21号住居跡 (F-6, 7)



1. 明褐色土、灰白色、黄色小石子や多く入る。
1a. 灰褐色に近い暗褐色。
1b. 黒線を帯びる、黄色粒多い。
1c. ローム粒子がやや多い。
2. 暗茶褐色。
2c. 暗茶褐色粘質土と黒色土の混土。
3. 黒色土。

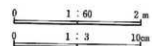


図56 I-21号住居跡遺物図

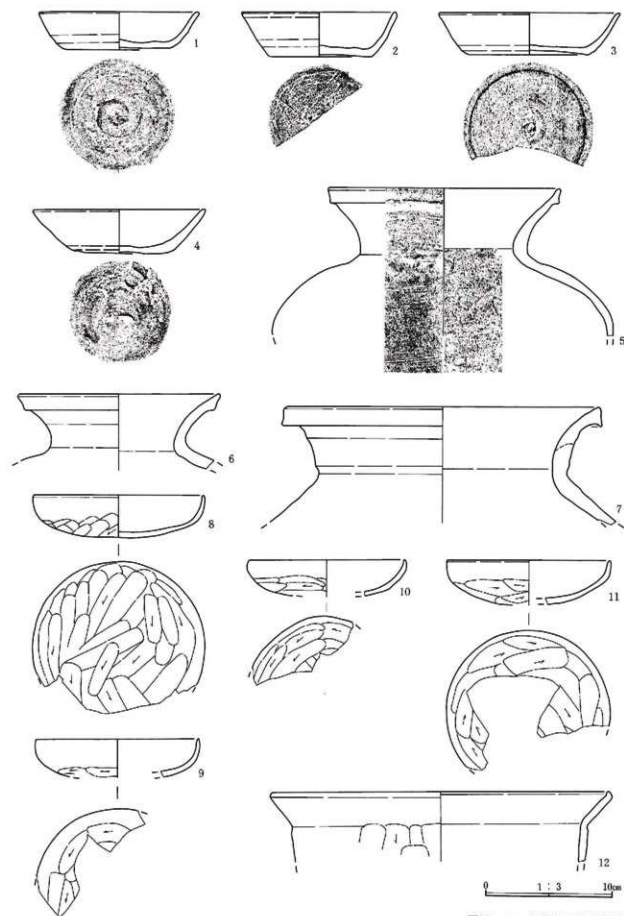
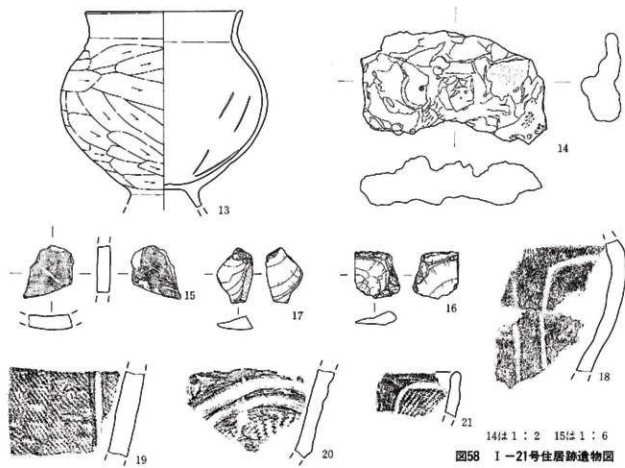
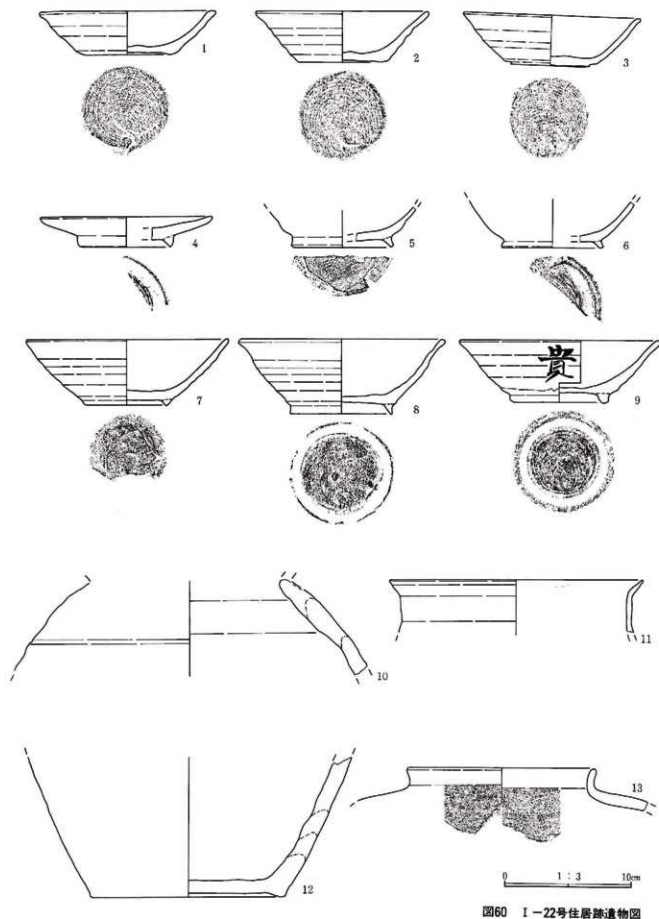
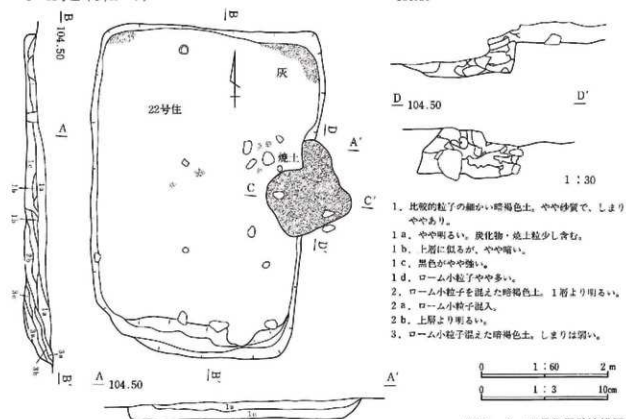


図57 I-21号住居跡遺物図



I-22号住居 (G, H-6)



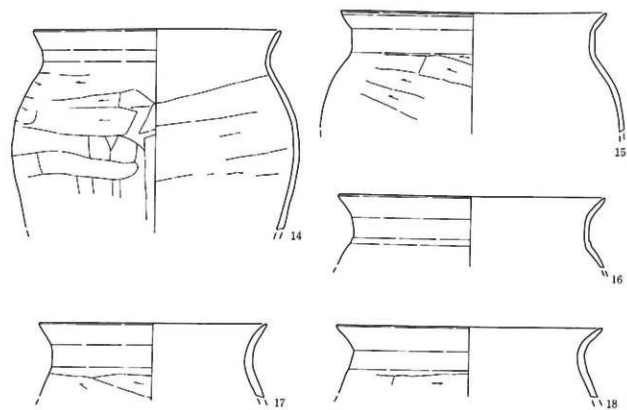
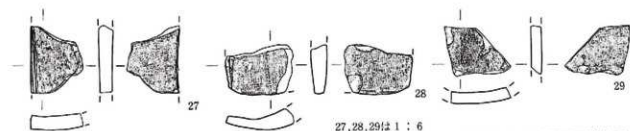


図61 I-22号住居跡遺物図



I-23号住居跡 (G-6)

図62 I-22号住居跡遺物図

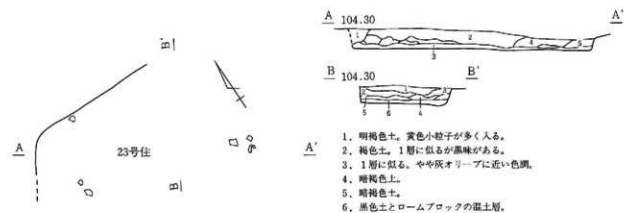
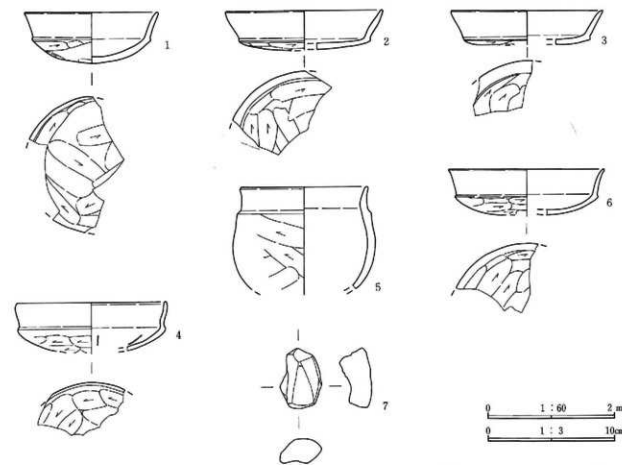
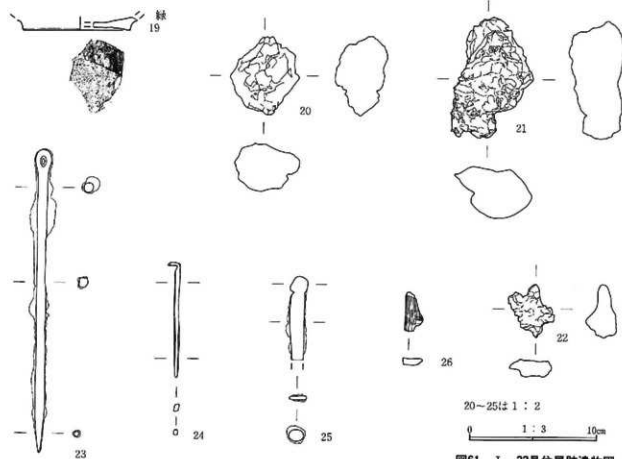


図63 I-23号住居跡遺物図



I-24号住居跡 (G-7)

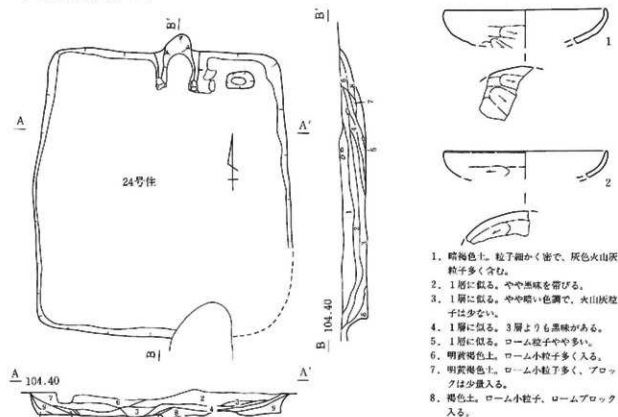
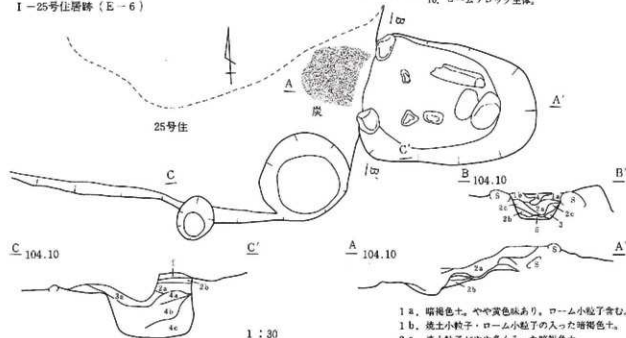


図64 I-24号住居跡遺構図

I-25号住居跡 (E-6)



1. 暗褐色土。粒子細かく密で、灰色火山灰粒子多く含む。
2. 1層に似る。やや黒味を帯びる。
3. 1層に似る。やや暗い色調で、火山灰粒子は少ない。
4. 1層に似る。3層より黒味がある。
5. 1層に似る。ローム粒子やや多い。
6. 明黄褐色土。ローム小粒子多く入る。
7. 明黄褐色土。ローム小粒子多く、ブロックは少量入る。
8. 褐色土。ローム小粒子、ロームブロック入る。
9. 褐色土。ローム小粒子、ロームブロック入る。
10. ロームブロック主体。

- 1 a. 暗褐色土。やや黄褐色あり。ローム小粒子含む。
- 1 b. 褐色土小粒子・ローム小粒子の入った暗褐色土。
- 2 a. 褐色土小粒子がやや多く入った暗褐色土。
- 2 b. 2 a層より、ローム・焼土が少い。
- 2 c. 焼土層少ない。黒色灰土帯びる。
3. 炭化物の入った暗褐色土。
4. ローム。
5. 焼土。

0 1 : 60 2 m
0 1 : 3 10 cm

図65 I-25号住居跡遺構図

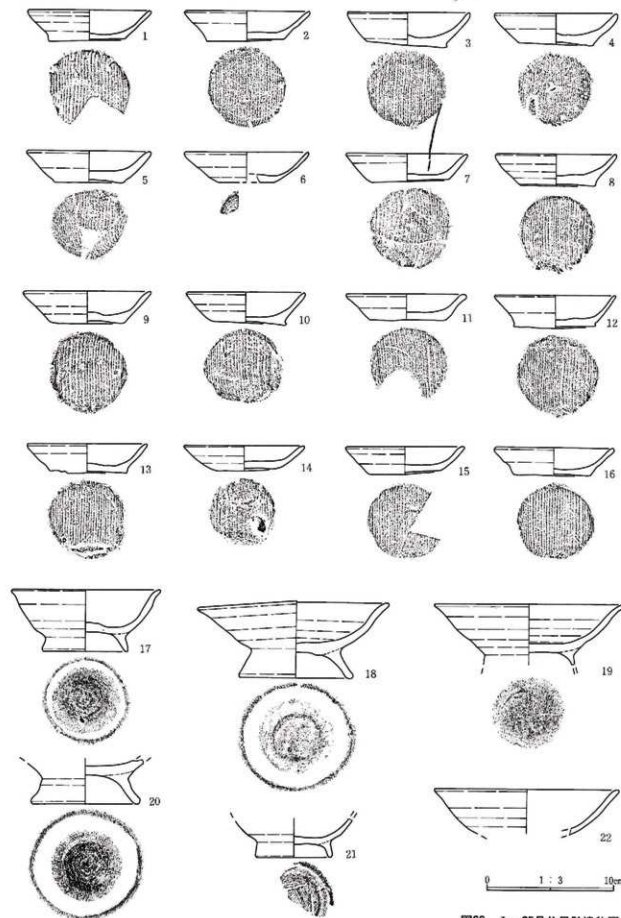


図66 I-25号住居跡遺構図

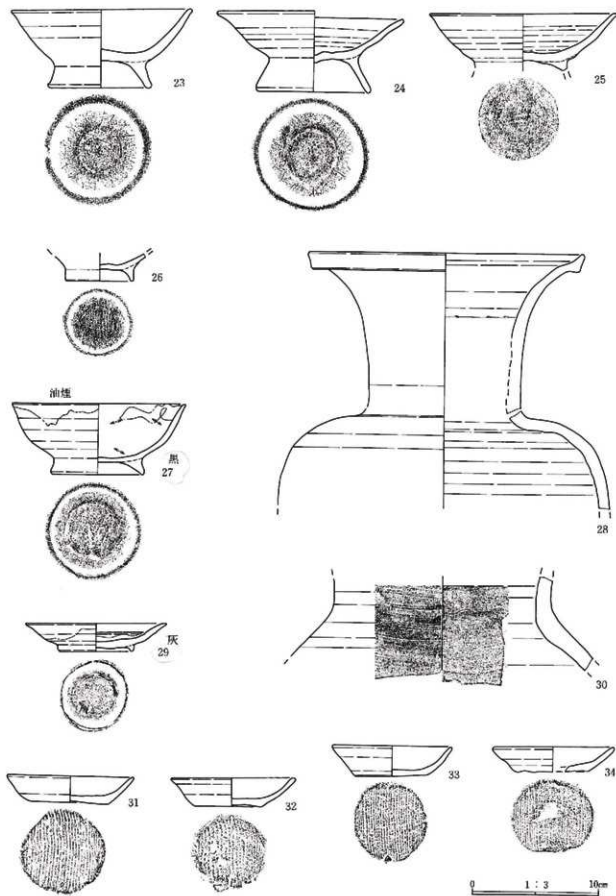


图67 I—25号住居跡遺物図

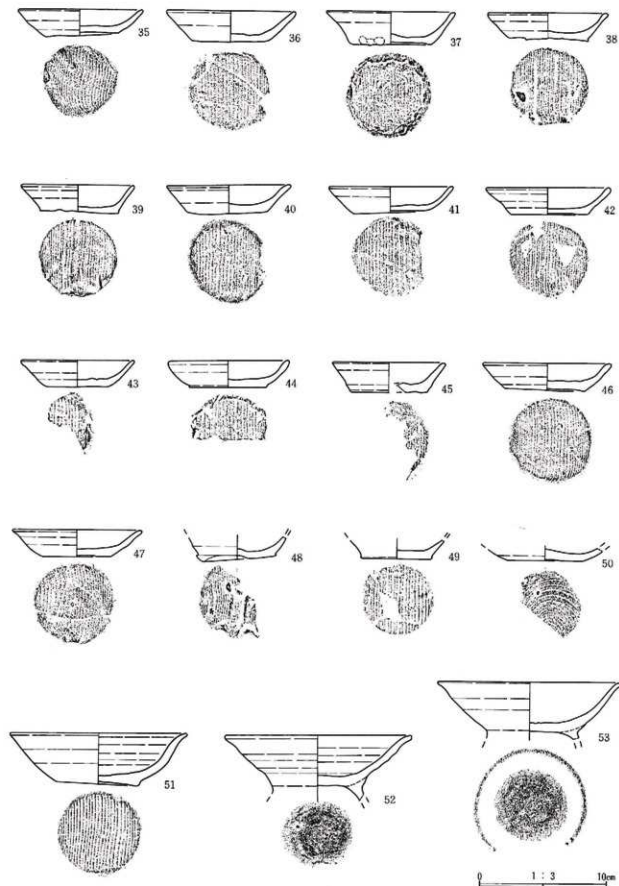


图68 I—25号住居跡遺物図

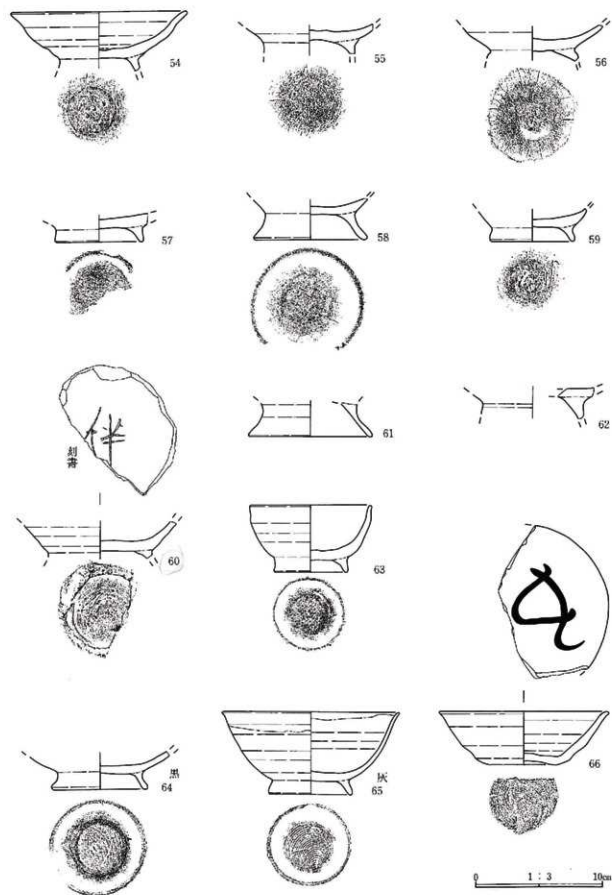


図69 I-25号住居跡遺物図

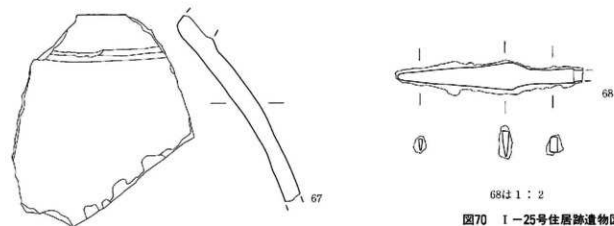


図70 I-25号住居跡遺物図

I-26号住居跡 (E-5)

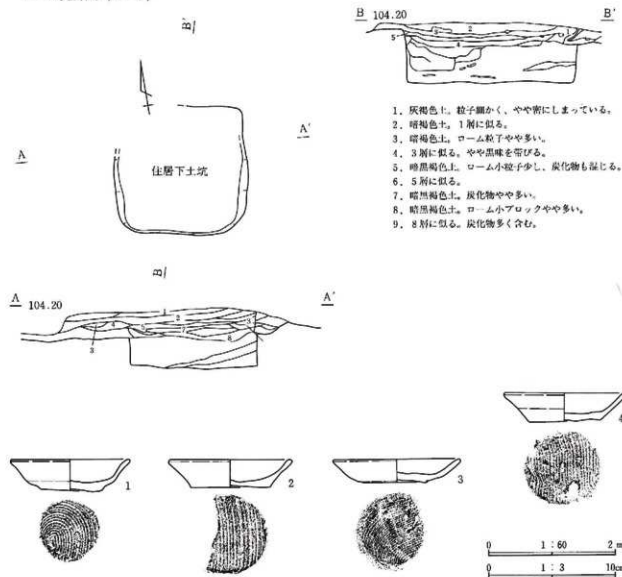


図71 I-26号住居跡遺物図

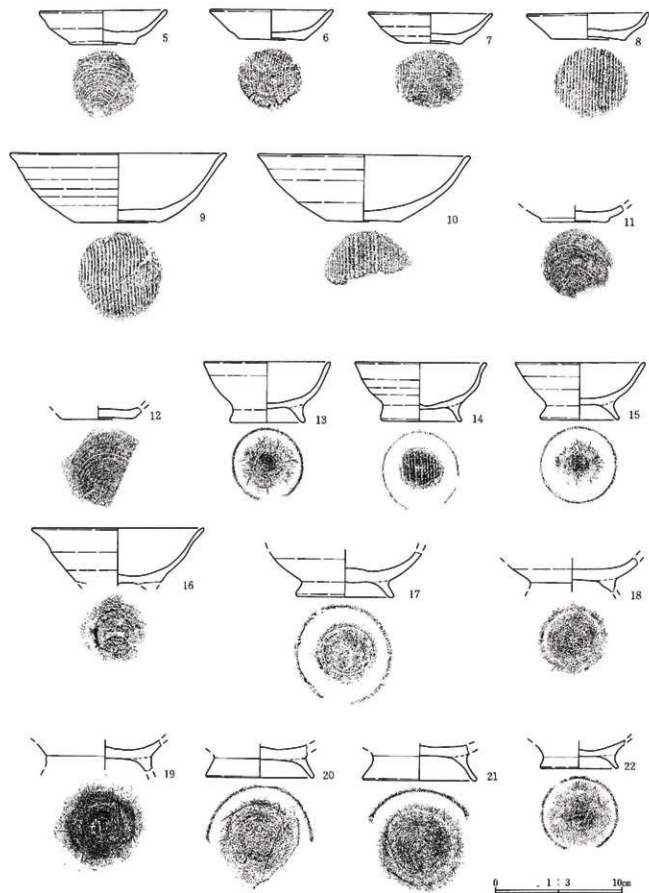


図72 I-26号住居跡遺物図

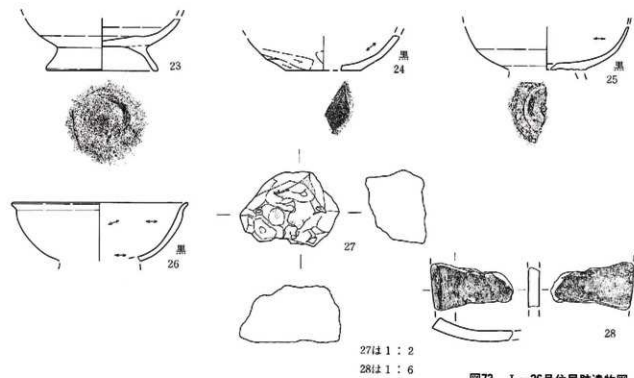
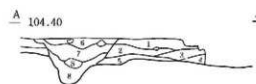
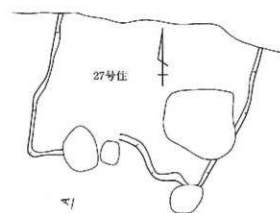


図73 I-26号住居跡遺物図

I-27号住居跡 (E-4)



1. 暗褐色上。粒子細かく密で織りよい。
2. 1層に似るが、炭化物の小粒子が混入。
3. 1層に似るが、意味を帯びる。
4. 暗褐色上。黄色小粒子がやや多く混じる。
5. 暗褐色上。やや粗まりが強い。
- 6-8. 土坑の埋戻上。

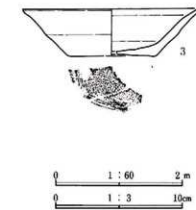


図74 I-27号住居跡遺物図

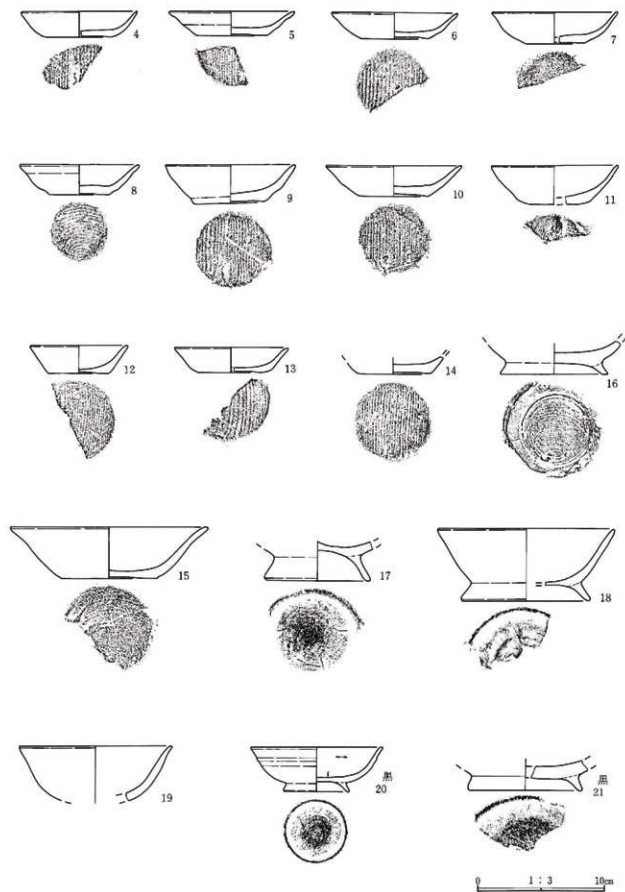


図75 I-27号住居跡遺物図

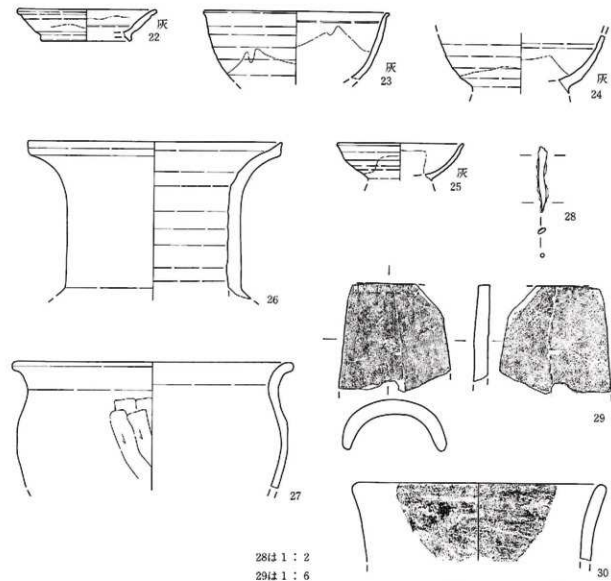


図76 I-27号住居跡遺物図

I-28 b 号住居跡 (E-7, 8)

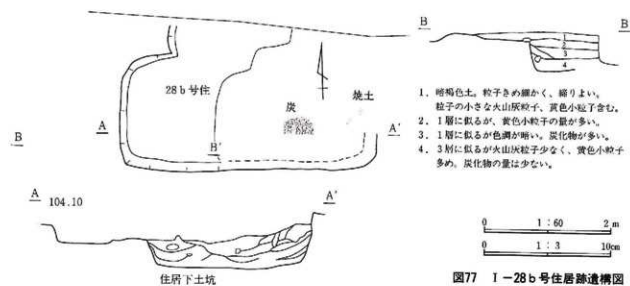


図77 I-28 b 号住居跡遺物図

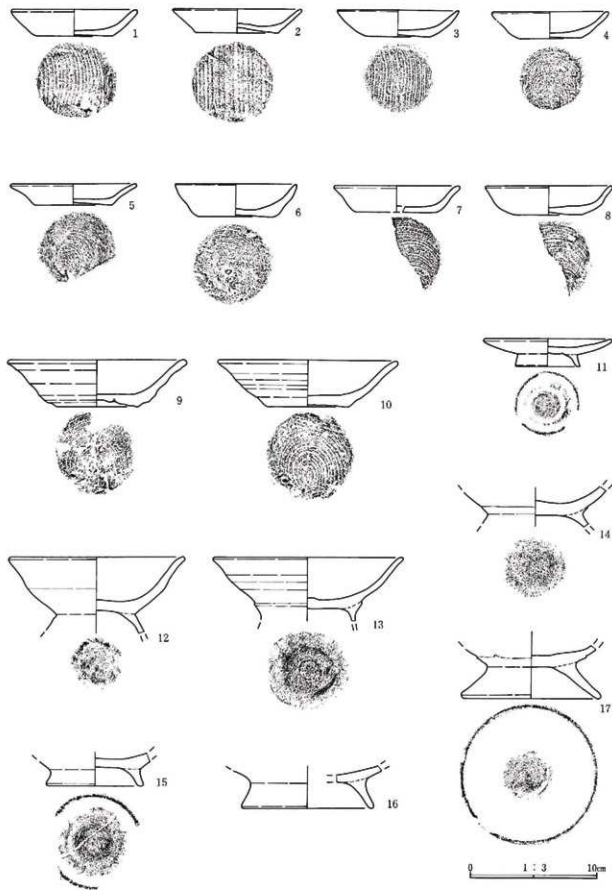


図78 I-28b号住居跡遺物図

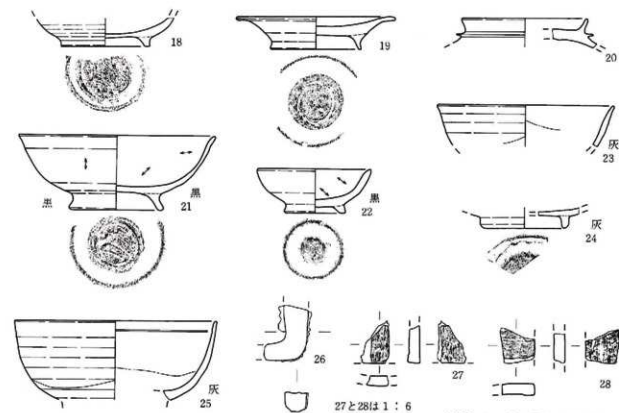


図79 I-28b号住居跡遺物図

I-29号住居跡 (F, G-8)

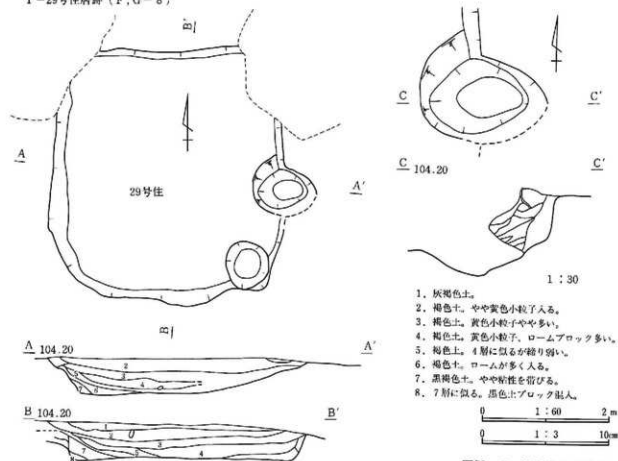


図80 I-29号住居跡遺物図

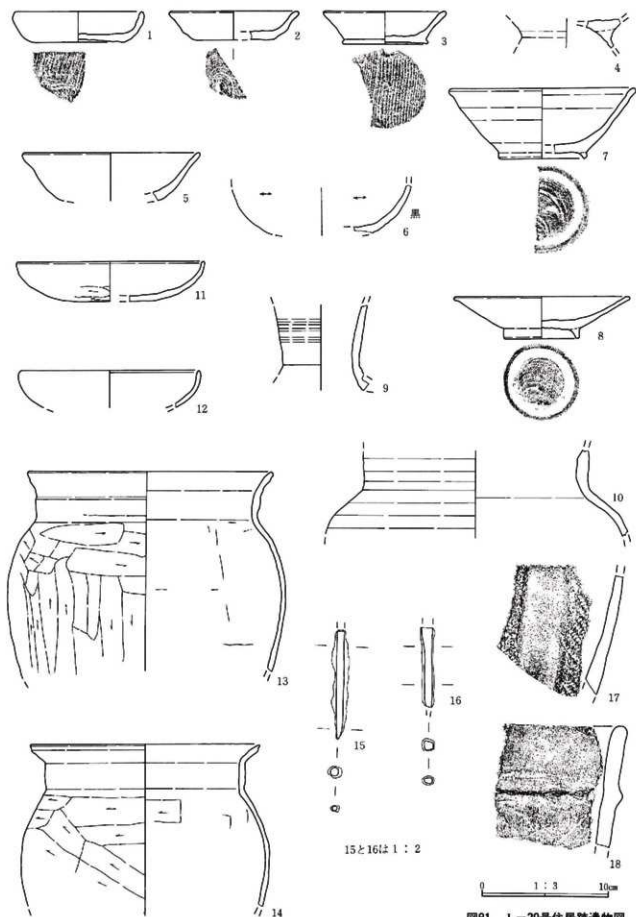


図81 I-29号住居跡遺物図

I-30号住居跡 (F-7)

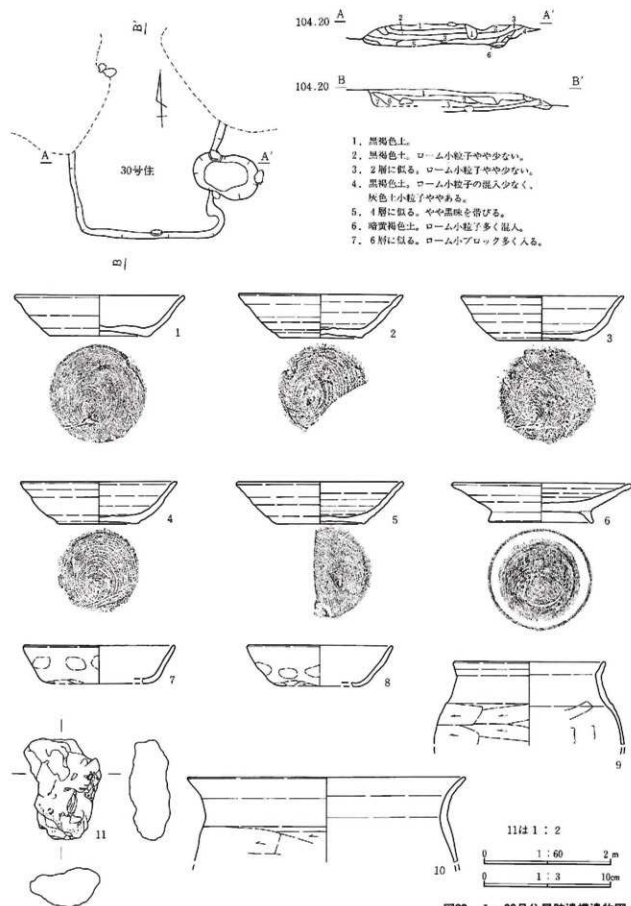


図82 I-30号住居跡遺物構造図

1. 黒褐色土。
2. 黒褐色土。ローム小粒子やや少ない。
3. 2層に載る。ローム小粒子やや少ない。
4. 黒褐色土。ローム小粒子の混入少なく、灰色小粒子ややある。
5. 4層に載る。やや混入を認める。
6. 暗褐色土。ローム小粒子多く混入。
7. 6層に載る。ローム小ブロック多く入る。